魔法少女リリカルなのは DevilsVivid

DevilStriker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　ＤｅｖｉｌｓＶｉｖｉｄ

【Ｎコード】

Ｎ７６９８Ｑ

【作者名】

ＤｅｖｉｌＳｔｒｉｋｅｒ

【あらすじ】

あの戦い、［Ｄ．Ａ事件］から四年がたち…機動六課を旅立って行った者達は、各自の道を進んでいた。そして戦いを終局へと導いた魔導剣士は、人々を助けるべく、今日も剣を振るう。

この小説は、前作［魔法少女リリカルなのは　ＤｅｖｉｌＳｔｒｉｋｅｒＳ］の続編です。

鮮烈な日常

ミッドチルダのとある住宅…そこには、一つ家族が住んでいた。

「これでよし…っと。ヴィヴィオーー！朝ご飯できたからバルダ起こしてきてーー！！」

栗色の髪をサイドポニーにした女性…高町なのはがその娘の高町ヴィヴィオに頼んだ。

「はーい！」

ヴィヴィオはなのはの頼みに元気に答える。

そして自身の兄の下へと向かったのだった。

――――バルダの部屋

「バルダお兄ちゃーん！朝ご飯だよーー！！」

「……」

ヴィヴィオの呼び掛けに何の反応を示さないバルダ。

「うー…早くしないと遅刻だよーー！！」

「……」

それでも反応が無いので、ヴィヴィオは最終手段を決行した。

「本当に早くしないとなのはママにディバインバスター撃たれちゃうよーー！！」

――――ガバッ！！――――

「おはようヴィヴィオ。今から着替えるから先に行っててくれるか？」

すると飛び起きるようにバルダが起きた。

「うん！じゃあ行くね！」

そう言ってヴィヴィオは　バルダの部屋から出ていった。

「…やれやれ。ヴィヴィオにはかなわないな」

そう言いつつ、バルダは服を着替えるのだった。

「「「ごちそうさま」」」

朝食を終えて、みんなで家を出るとき、

「バルダとヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

となのはが聞いた。

「まあ、そうだね。なあ？ヴィヴィオ？」

バルダが相槌を打ちながらヴィヴィオに話しをふる。

「そだよー。帰りにちょっと寄り道してくけど」

そしてヴィヴィオがなのはの質問に答える。

「今日はママもちょっと早めに帰ってこられるから晩御飯は二人の進級のお祝いモードにしよっか？」

なのはが指をピッとさしながらそう提案した。

「いいねー♪」

なのはの提案に賛成するヴィヴィオ。

「そうだ。帰ったら俺も準備しておくよ」

そしてバルダがそう言った。

「ありがとうバルダ♪」

なのははバルダの気遣いに素直に感謝する。

「あっ！なのはママ、バルダお兄ちゃん、そろそろ時間！」

するとヴィヴィオが通信端末を見ながら言った。

「それは大変。それじゃ」

「うん」

「「「行って来まーす！」」」

こうしてバルダ達は家を出掛けていったのだった。

Ｓｔ（ザンクト）．ヒルデ魔法学院、初等科・中等科棟…

「それじゃヴィヴィオ。俺はこっちだから」

おもむろにバルダが中等科棟を指差しながら言った。

「うん！またね！バルダお兄ちゃん！」

「ああ、またな」

そうして手を振りながらバルダとヴィヴィオはそれぞれの棟に入っていった。

「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオが振り返ると

「ごきげんようヴィヴィオ」

「おはよー」

ヴィヴィオの友達のリオとコロナがやってきた。

「コロナ！リオ！」

二人に駆け寄るヴィヴィオ。

「クラス分けもう見た？」

コロナがヴィヴィオとリオに聞く。

「見た見た！！」

「三人一緒のクラス！！」

それにヴィヴィオ達は元気に答え、

「「「いえーーい♪」」」

と、ハイタッチをした。だが流石に皆の前でやったので、人目を集

めた。故にヴィヴィオ達が顔を赤くしていたのは言うまでもない。

一方バルダは、

「ふぅ。やっぱここは気持ちいいな～」

学院の屋上で寝転がっていた。

「こんな所にいたのですか」

すると屋上の扉から一人の少女が出てきた。

「ん？確か君は――――」

「あなたと同じクラスのアインハルト・ストラトスです。先生があなたを呼んでくるように言われて来ました」

「そっか…そいつは悪いことしたな、ゴメンゴメン。俺は高町バル

ダだ。よろしくな」

自己紹介しながら立ち上がるバルダ。

「よろしくお願いします。バルダさん、では行きましょう」

アインハルトは踵を返しながら言った。

「OK」

そうしてバルダとアインハルトは教室に戻っていった。

―――――――――――――――

「は～。終わった終わったー」

始業式が終わり、リオが軽く伸びをしながら言った。

「寄り道してく？」

コロナが二人にそう言う。

「もちろーん♪」

「また図書館寄ってこーよ！借りたい本あるし」

するとリオがそう提案した。

「あ、でもその前に教室で記念写真撮りたいな。お世話になってるみなさんに送りたいんだ。みなさんのおかげでヴィヴィオは今日も元気ですよ……って」

そしたらヴィヴィオが皆と写真が撮りたいと言いだした。

「「うん。いいよ」」

二人は軽くＯＫし、写真を撮った後、様々な人達に送ったのだった。

――――高町家――――

「ただいまー」

バルダは自宅へと帰宅していた。

「おかえり、バルダ」

するとフェイトがバルダを出迎えてくれた。

「あ、フェイトさん。いらっしゃい。…そっか、明日の午後まで休みか」

「そうだよ。だからバルダとヴィヴィオのお祝いしようかなって思って」

「なるほど、それはありがとうございます」

「そういえばヴィヴィオは？」

フェイトがヴィヴィオは何処にいるのか聞いた。

「ヴィヴィオならリオとコロナと一緒に図書館に行ってるよ」

「そういえばヴィヴィオって自分専用のデバイス持ってないんだよね」

ふとコロナがヴィヴィオの通信端末を見ながら言った。

「それフツーの通信端末でしょ？」

リオも不思議そうに言った。

「そーなんだよー。うち、ママとレイジング・ハートがけっこー厳しくって」

■■■■■■■■■■■■

「基礎を勉強し終えるまでは自分専用のデバイスとかいりません」

〈それまでは、私が代役を〉

■■■■■■■■■■■■

「だって」
と残念そうに言うヴィヴィオ。
「「そーかー」」
それに苦笑いの二人。
「リオはいーなー。自分用のインテリ型で」
「あははー…」
〈すみません〉
「バルダお兄ちゃんなんかデバイス作っちゃうし」
「あ、それは私も驚いた」
「うんうん！確か九歳の時に作ったんだったよね！」
流石の二人もこの話には食いついた。たった九歳でデバイスを作ったバルダはやはり凄いらしい。
「ほんっと、お兄ちゃんはスゴいよ」
ヴィヴィオが感嘆していると、

――――ピピピッ！――――

ヴィヴィオの端末からメールが入った。

「あ…噂をすればお兄ちゃんからのメールだ」

どうやら相手はバルダだった。

「なにかご用時とか？」

コロナが聞くと

「あー、へいきへいき。早めに帰ってくるとちょっと嬉しいコトがあるかもよ…だって」

と大丈夫だとヴィヴィオが答える。

「そっか」

「じゃ、借りる本決めちゃお！」

「うん！」

その後、手頃な本を借りて…ヴィヴィオ達はそれぞれの帰路についた。

鮮烈な日常（後書き）

えー、お久しぶり？です。作者ことＤｅｖｉｌＳｔｒｉｋｅｒ、略して…デビルです。因みにこの小説の時間軸はｖｉｖｉｄです。なんかあっちの方がやりやすいかなぁと思ってのことです。
流石に以前のような投稿スピードではなく、他に小説を投稿している皆さんのような投稿スピードになります。そろそろ自分も忙しい時期なので…そんな感じで、また頑張ります。

主人公紹介

高町バルダ

容姿…デビルメイクライ3のダンテを幼くした感じで、身長はエリオと同じぐらい。まあ顔立ちは少し大人びてきているが、相変わらずのクール&ビューティーである。

年齢…13歳

デバイス…アベンジャー
（見た目はリベリオン。
待機状態はアミュレット。因みに通常のバリアジャケットはデビルメイクライ1のダンテの服装である）

AIの声…子安武人
（戦国BASARAの猿飛佐助や銀魂の高杉晋助など）

ソル&ルナ
（赤い装飾がソル。青い装飾がルナ。二丁拳銃型のアームドデバイスでダンテのエボニー&アイボリーの色違いである）

レアスキル…スペルハングル
（自身と周りに霧散している魔力を操り、剣や槍…シールドを作り出したりする事が出来る。更には相手の撃った魔力弾を操り、撃った本人に射出させることもでき、とても機転が利く能力である）

ＢＡＳＡＲＡモード

ブレイカー（徳川家康）

葵の極み
（衝撃波を上空に向けて打ち上げる）

耐心磐石
（魔力で強化した頭突き）

天道突き
（魔力を圧縮した拳を敵に繰り出すパンチ。衝撃波を飛ばすこともできる）

虎牙玄天
（瞬時に敵の懐へ飛びこんでボディーブロー）

陽岩割り
（地面に拳を叩きつけ、衝撃波で敵を吹き飛ばす）

東風の乱舞
（高速の乱打攻撃）

凶王（石田三成）

斬滅
（前方に強烈な斬撃を放つ）

斬首
（多分悪魔にのみ使用。敵一体を仰向けにして動きを封じ、首を跳ねる）

恐惶
（特殊移動技。凄まじい魔力を纏って敵に突撃。そして神速の名の下に敵を切り刻む）

断罪
（居合いと同時に身を翻し、敵を空中に打ち上げる）

号哭
（目にも留まらぬ速さで敵に近づき、凪払う）

斬悔
（瞬速の居合いによって放たれる数多の斬撃）

鬱屈
（一瞬の後に対象の敵を切り裂く瞬速攻撃）

ＤＲＡＧＯＮ　ＣＬＡＷ（伊達政宗）

ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ
（前方に電撃を放つ）

ＴＥＳＴＡＭＥＮＴ
（最大最強の一刀攻撃）

ＤＥＡＴＨ　ＦＡＮＧ
（三本の刀で敵を切り上げる）

ＪＥＴ－Ｘ
（両手の六刀を交差させ、真空の刃で敵を切り裂く）

ＭＡＧＮＡＭ　ＳＴＥＰ
（三本の刀で超高速の突きを繰り出す）

ＣＲＡＺＹ　ＳＴＯＲＭ
（四本の刀で敵を滅多切りにした後、吹き飛ばす）

ＰＨＡＮＴＯＭ　ＤＩＶＥ
（六刀で敵を凪払い、さらにジャンプから強力な吹き飛ばし攻撃を加える）

天覇絶槍（真田幸村）

虎炎
（炎の拳を敵に叩きつける）

大車輪
（旋風を起こし、敵を空中に打ち上げる）

火走
（突進して敵をなぎ払う）

烈火
（怒涛の連続突き。最後にトドメの一撃で敵を吹っ飛ばす）

鳳凰落
（宙高く飛び上がり、ニ槍を一気に振り下ろして渾身の一撃を叩きつける）

千両花火
（渾身の一撃で敵を吹っ飛ばす）

火焔車
（炎乱舞で周囲の敵を焼き尽くす）

性格…気さくで明るい

好きなもの…ピザとストロベリーサンデー、平和、仲間、家族、自由

嫌いなもの…退屈、外道、悪魔　、家族や仲間を傷付ける奴

様々な人達を助けたいと思い、父ダンテがかつてやっていた便利屋

「Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ」を営む。だが、なのはの必死な説得により、ヴィヴィオと同じＳｔ．ヒルデ魔法学院に入学した。ちなみにバルダは授業中殆ど昼寝をしていて、担任の教師の悩みの種である。そして成績もトップでもあるから、尚更である。

（何故なら教科書の中身を全て覚えるから）

学校が終わったり、なかったりすると…便利屋として行動する。最近の悩みはなのはとヴィヴィオが女物の服を着せようとすることである。

声優…杉山紀彰

（ＮＡＲＵＴＯのサスケ、ＦＡＴＥの士郎など）

セイクリッド・ハート（前書き）

早いとこバルダの仕事姿が書きたいなー。
ではどうぞ

セイクリッド・ハート

「たっだいまーっ！」

勢い良くドアを開けながら家に入るヴィヴィオ。

「おかえりーヴィヴィオ」

「おかえり。ヴィヴィオ」

するとエプロンに身を包んだフェイトとバルダがヴィヴィオを出迎えた。だがフェイトがいる事にヴィヴィオは驚く。

「あれ？フェイトママ！？」

「うん」

「バルディッシュも」

〈Ｈｅｌｌｏ　ｌａｄｙ〉

「フェイトさんは艦（ふね）の整備で明日の午後までお休みなんだそうだ」

驚いているヴィヴィオを余所にバルダは事情を説明する。

「だから、ヴィヴィオとバルダのお祝いしようかなって」

「そっか…ありがと、フェイトママ」

ヴィヴィオはフェイトの優しさを嬉しく思った。

「ふふっ。ヴィヴィオ、今からお茶入れるから、着替えてくるといいよ」

二人のそんなやり取りを微笑みながら言うバルダ。

「うん！わかった！」

そしてヴィヴィオは着替えるため自分の部屋へと戻っていった。

「さて、お茶の準備をするか」

「よしっと、私も作りかけのお菓子を作らないと」

そうしてバルダとフェイトは雑談をしながら各自の作業に取り掛かった。　その後、三人で仲良くお茶をして、バルダとヴィヴィオの進級祝いをするための晩御飯の下拵えをして、なのはの帰りを待つのだった。

「ただいまー」

夕暮れになったときに、なのはが帰ってきた。

「「「おかえり（なさい）。なのは（母さん／ママ）」」」

なのはを出迎えるバルダ、ヴィヴィオ、フェイトの三人。

「うん。もうご飯って出来ちゃってる？」

「いや、あとは母さんが買ってきてくれた野菜をサラダにすれば一通り完成だよ」

なのはの問いに答えるバルダ。

「そっか。じゃあ早く作らないとね」

そう言ってなのはは台所へと向かった。

――――数十分後…

「「ごちそうさまー！」」

「はい、お粗末様でした」

みんな晩御飯を食べ、各自で一服していると、

「さて！今夜も魔法の練習しとこーっと」

おもむろにヴィヴィオが立ち上がりながら言った。

「あー、ヴィヴィオ。ちょっと待って」

それをなのはが引き止める。

「？　なあに？なのはママ？」

ヴィヴィオは怪訝そうに振り向いた。

「ヴィヴィオももう四年生だよね」

「そーですが？」

なのはの言葉に首を傾げるヴィヴィオ。するとなのははヴィヴィオにとって嬉しい事を述べた。

「魔法の基礎も大分できてきた…だから、そろそろ自分のデバイスを持ってもいいんじゃないかなって」

「ほ…ほんとっっ！？」

それに驚くヴィヴィオ。

「じつは今日フェイトさんがマリーさんから受け取って来たんだったよね」

「そうだよ。はい、ヴィヴィオ」

するとデバイスが入っている箱がヴィヴィオに渡された。

「あけてみてー」

「うん！」

――――パカッ――――

「うさぎ……？」

箱の中には何故かうさぎのぬいぐるみが入っていた。デバイスらしきもの入っていないことに唖然とするヴィヴィオ。

「あ、そのうさぎは外装というか、アクセサリーね」

「中の本体は普通のクリスタルタイプだよ」

ヴィヴィオに補足を入れるなのはとフェイト。

「お…（なかなか面白い機能入れたな～マリーさん）ヴィヴィオ、前見てみ」

「？」

バルダに言われて前を見ると…

――――フヨフヨ…――――

さっきまで箱の中に入っていたうさぎのデバイスが中を浮いていた。

「とっ…ととと飛んだよっ！？動いたよっっ！？」

「それはオマケ機能だって。マリーさんが」

物凄く驚くヴィヴィオに説明するフェイト。

「あ…」

するとうさぎのデバイスがヴィヴィオの下へとやってきた。その様子を見ながらも説明を続ける。

「色々リサーチもして、ヴィヴィオのデータにあわせた最新式ではあるんだけど……中身はまだほとんどまっさらの状態なんだ」

「名前もまだないからつけてあげてって」

説明も終わり、ヴィヴィオにデバイスの名前をつけるように言うフェイト。

「えへへ…実は名前も愛称ももう決まってたりして」

ヴィヴィオはフェイトに自信満々に答える。するとハッとしたように

「そうだママ！リサーチしてくれたってことはアレできる！？アレ！！」

勢い良くなのはに聞いた。

「もちろんできるよー。セットアップしてみて」

なのははウインクをしながら当然といったように答えた。

「……？」

フェイトは怪訝そうに首を傾げていた。

「マスター認証…高町ヴィヴィオ」

ヴィヴィオは今、家の庭にいた。そしてヴィヴィオを中心にベルカ式の魔法陣があった。

「術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド…わたしのデバイスに個体名称を登録…愛称は［クリス］…正式名称、［セイクリッド・ハート］」

デバイスの正式名称にハッとするなのは。
それをクスッと笑うフェイトとバルダ。

「いくよ、クリス」

その間にヴィヴィオはセットアップに入る。

「セイクリッド・ハート！セーーート・アーーーーップ！！」

そこには、大体16・17歳ぐらいで、髪をサイドポニーで纏めた大人の姿のヴィヴィオが立っていた。

「ん…！やったーーー！ママ、お兄ちゃん、ありがとーーー！！」

「あー上手くいったねー」

「よかったな。ヴィヴィオ」

「……」

喜ぶヴィヴィオを微笑みながら言うなのはとバルダ。だがフェイトは何故か呆然としている。

――――ペタッ――――

するとフェイトが床に腰を落とした。

「フェイトママ？」

「フェイトさん？」

それをバルダとヴィヴィオが怪訝そうに見ている。

「……あ」

そしてなのはがしまったと言うような顔になった。

「なのは……ヴィヴィオが…ヴィヴィオがぁーーーーーーー！！」

そしてなのはに凄い勢いで迫った。

「いや、あの…落ち着いて、フェイトちゃん。これはね？」

混乱しているフェイトをなんとか落ち着かせるなのは。

「ちょ……！なのはママ！なんでフェイトママに説明してないの！！バルダお兄ちゃんも！！」

ヴィヴィオは説明していない二人に問い詰める。

「いやー悪い悪い。てっきりフェイトさんもコレを知っているのかと思って説明していなかったな～～～～アッハッハッハ」

バルダはこの事をもう知っているのかと思い、説明しなかったらしい。

それに対しなのはは…

「いやその…つい、うっかり…」

素で忘れてたらしい…

「ちょ…母さん…それはちょっと」

「なのはママ…うっかりって」

「うー…ごめんね？」

なのはのうっかりに呆れる二人だった。

天と星に誓って

ヴィヴィオがクリスをセットアップしてかつての聖王の姿でドタバタしていた頃…

「連続傷害事件？」

ここナカジマ家ではある事件について話し合っていた。

［ああ…事件ではないんだけれど］

モニターから、ギンガが補足を入れる。

「どういうこと？」

ノーヴェが聞いた。それにギンガは説明する。

［被害者は主に格闘系の実力者。そういう人に街頭試合を申し込んで……］

「フルボッコってわけ？」

［そう］

「あたし、そーゆーの知ってるっス！喧嘩師！ストリートファイター！」

するとウェンディがテンションを上げながら言った。それに対し、隣にいるディエチがうるさいと注意する。

［ウェンディ正解。そういう人達の間で話題になってるんだって］
ウェンディが言うことも合っているようで頷きながら言うギンガ。
そしてその場にいる皆に注意する。
［被害届が出てこないから事件扱いではないんだけど…みんなも襲われたりしないよう気をつけてね］
「そう…」
「気をつける。つーか来たら逆ボッコだ」
皆ひとまずギンガの忠告に頷いた。
「そういえばバルダにこの事については依頼したの？」
するとディエチがギンガに聞いた。
「いいえ。けど後でするつもりよ。一応解決しなければならないからね」
「そうか」
「ふむ…これが容疑者の写真か」
話がある程度進んだところで、ふとチンクがモニターに共に写っている写真に目を移す。
［ええ、自称［覇王］イングヴァルト］

「それって」

容疑者の名前にハッとする一同。

［そう。古代ベルカ…聖王戦争時代の王様の名前］

その頃バルダ達は――――

「それで…どうしてこんな事に？」

フェイトによる事情聴取を受けていた。

「あ～、えーと…」

どう説明しようかと思案するなのは。そこでヴィヴィオが説明する。

「いや、あのねフェイトママ？大人変化自体は別に聖王化とかじゃないんだよ。魔法や武術の練習はこっちの姿の方が便利だから、き

ちんと変身できるように練習してたの。ね？バルダお兄ちゃん」

ヴィヴィオはバルダの方を見ながら言った。

「まあ大人の姿になれたのは驚いたけど…ヴィヴィオの言うとおりですよ、フェイトさん。ヴィヴィオだって強くなりたくて頑張ってるんです。ですよね？母さん？」

そしてなのはに話を振る。

「そうなの！」

いきなり話を振られて、少し慌てながら答えるなのは。

「でも……」

それでも心配なのか、不安げな様子のフェイト。

「んーー…」

そんなフェイトの様子を見て、考え込むヴィヴィオ。するとおもむろに、

「クリス。変身解除！（モードリリース）」

大人変化を解除した。

「なにより変身したって、ヴィヴィオはちゃんとヴィヴィオのまんま！」

そしてフェイトにかがみ込みながら安心させるように言う。
「ゆりかごもレリックももうないんだし…だから大丈夫！クリスもちゃんとサポートしてくれるって」
「……うん」
ヴィヴィオの言葉に安心するフェイト。
「心配してくれてありがとう、フェイトママ。でもヴィヴィオは大丈夫です」
心配してくれるフェイトに感謝するヴィヴィオ。
「それにそもそもですね？ママたちだって今のヴィヴィオくらいの頃にはかなりやんちゃしてたって聞いてるよ？」
「ああ～、俺もはやてさんから聞いた聞いた。とにかく凄かったらしいじゃないですか」
「そ…それは、その…」
「あはは…」
二人の言葉に顔を赤くするなのはとフェイト。
そんな二人を余所に、
「そんなわけで、ヴィヴィオはさっそく魔法の練習に行ってきたいと思いまーす」

ヴィヴィオは魔法の練習に行こうとする。

「あ、私も！」

するとなのはも行くと言った。

「いいですか？フェイトママ、バルダお兄ちゃん」

フェイトとバルダに確認をとるヴィヴィオ。

「はい、気をつけて」

「頑張って来い。だがやりすぎるなよ？」

それにフェイトとバルダはＯＫを出す。

「それじゃあ、行って来まーす！」

「フェイトちゃん、バルダ、行ってくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

「あんまり遅くならないで下さいね？」

バルダとフェイトは笑顔で二人を見送った。

「――――って事になっててね？本当にびっくりしたんだけど…キャロとエリオは聞いたりしてた？」

ヴィヴィオ達が出掛けていった後、フェイトはさっきの事をキャロとエリオに話していた。

［大人モードってだけはたまに］

［でもまさか変身制御の事とまでは…］

と二人は言った。

「やっぱりー？」

［ヴィヴィオ、魔法も戦技も勉強するのが好きですから、できる事はなんでも試してみたいんですよ］

［ヴィヴィオはあれでしっかりしてます。心配ないと思いますよ］

「……うん！」

キャロとエリオと話してスッとしたのか、晴れやかなフェイト。

「そっちはどう？お仕事の調子は」

そして話題を変更する。

［今日もホントに平和でしたよ］

［今やってる希少種観測ももうすぐ一段落ですから、来月にはフェイトさんのところに帰れそうです］

「ほんと？じゃあ私も休暇の日程調整してみるね」

［はい］

［お買い物に行きたいです～♪］

そうして、三人は笑い合ったのだった。

一方ヴィヴィオ達は魔法訓練場に向かっていた。

「♪やっぱりいいなー、大人モード♪ねークリス♪」

軽快にステップを踏みながら歩くヴィヴィオ。

そしてクリスはヴィヴィオの言葉に同意するように片手を上げる。

「だよねーー♪」

それにヴィヴィオは嬉しそうに言った。

「ね、ヴィヴィオ？」

するとなのはがヴィヴィオを呼び止める。

「はい？」

それにヴィヴィオは怪訝そうに振り返る。

「大人モードはヴィヴィオの魔法で、自分の魔法をどう使うかは自分で決める事なんだけど……いくつか約束してほしいんだ」

「……うん」

真剣な様子のなのはに、ヴィヴィオも真剣に聞く。

「大人モードは魔法と武術の練習や実践のためにだけ使うこと…悪戯や遊びで変身したりは絶対しないこと…ママと約束」

そう言ってなのははヴィヴィオに指切りをしようと小指を前に出す。

「うん。遊びで使ったりは絶対しません」

それにヴィヴィオも応えるべく、小指を前に出し、指切りをした。

「天に誓って？」

「天と星に誓って」

それから少し間が空き、そしたら満足したのか、なのはは指を離した。その後、ヴィヴィオはこう続けた。

「それに、魔法で身長がママよりおっきくなったって、心まで大人になるわけじゃないもん。ヴィヴィオはまだまだ子供だから、ちゃんと順番追って大人になってくよ。普通に成長してこの姿になった時恥ずかしくないように、自分の生まれとなのはママの娘でバルダお兄ちゃんの妹だって事に、えへんと胸を張れるように……」

ヴィヴィオが全て言い終わると、なのははフッと笑い、

「ちょっと生意気！」

「にゃっ！」

とヴィヴィオに抱きついた。

「にゃー！せっかくイイ事言ったのにーー！」

「あはは♪」

互いに笑い合うその姿は、正に親子であった。

そしてしばらく歩いた後、漸く魔法訓練場に着いた。

「じゃ、基本の身体強化系からね。それから放出制御！」

ヴィヴィオは練習する内容をクリスに言う。そしてクリスはヴィヴィオの言葉にピシッと対応する。

「クリスの慣らしもあるんだからいきなり全開にはしないんだよ」

そこでなのはの注意が飛ぶ。

「だーいじょーぶ！」

それにヴィヴィオは平然と返す。

「（帰ったらコロナとリオにメールを送って…ノーヴェにも、明日から一杯一緒に練習しようねって伝えて…ああ、それから…またあの子に会いに行こう。わたしの故郷に咲いてた花と、綺麗な世界の写真を持って）」

そう思いながら、ヴィヴィオは練習に励んだのだった。

とある一室にて…

――――ピピピッ！――――

〈マスター。ギンガさんから何か依頼のようだぜ〉

バルダの部屋に、デバイスであり、バルダの相棒であるアベンジャーの電子音が鳴り響く。

「わかった。繋げてくれ」

そしてモニターを開いた。するとギンガがモニターに写った。

［こんばんは。バルダ］

「こんばんはギンガさん。…それで、どういった依頼ですか？」

挨拶を済ませ、依頼内容を聞く。

［ええ、実は最近、連続で傷害事件が起きてるって知ってる？］

「まあ情報屋から聞きましたね。なんでもかなり強いとか」

［そうなの。そこでバルダにも協力してもらいたいのだけれど…］

「わかりました、その依頼受けましょう。それと依頼料は後ほど言います」

［ええ、お願い。容疑者らしき人物の写った写真をそっちに送るね…それと、気をつけて］

「了解。ではまた」［うん］

そしてモニターを閉じる。

「さて、その容疑者ってのはどういう奴かな？」

そう言いながらギンガから送られた写真を見るバルダ。

「……（あれ？コイツってもしかして）」

写真を見て、何やら考え込むバルダ。

〈どうかしたかい？マスター〉

アベンジャーが怪訝そうに聞く。

「（いや、気のせいだろ）……なんでもない。さ、他の資料を見せてくれ」

〈わかった〉

そうしてバルダは一抹の不安を抱きながら、事件の資料を目に通していたのだった。

お見舞い（前書き）

前作の時の投稿の速さはどこへやら…
まあのんびりとした投稿もまた一興。なんかおじいさんみたいですね。
それではどうぞ

お見舞い

ギンガがバルダに依頼を頼んだ後のナカジマ家は…

――――グツグツ…――――

現在、みんなで鍋を食べていた。

「へーついにヴィヴィオもデバイス持ちッスか」

「良かったね。今度見せてもらおう」

ヴィヴィオがデバイスを貰った事で盛り上がるウェンディ達。

「高町嬢ちゃんちの娘さんか…今いくつだっけ？」

「１０歳ですね。四年生ですよ」

ゲンヤの疑問にギンガが答える。

「もうそんなか。前見たときは幼稚園児くらいだったと思ったがなぁ」

ゲンヤはさも懐かしむように言う。

「それ六課時代じゃない」

「もうだいぶ前ッスよ」

ずいぶん前の事を言うゲンヤに苦笑いのウェンディとディエチ。

「ヴィヴィオの武術師範としてはやはり嬉しいか？」

するとチンクがノーヴェに言った。

「え」

いきなり話を振られ、戸惑うノーヴェ。そして顔を赤くしながらも答える。

「別に師匠とかじゃないよ。一緒に練習してるだけ。まだまだ修行中同士練習ペースが合うからさ」

「そういやギンガ、バルダには依頼したのか？」

ゲンヤはノーヴェの様子を微笑みながら見た後、ギンガに聞いた。

「はい、依頼料については後ほど言うそうですよ」

「まあたそれか…この前もそう言って依頼料を貰うの忘れてたよな～」バルダの対応に困ったように言うゲンヤ。

「あー、バルダってあれで結構遠慮深いッスからね」
「全くだ。もう少しそこは父親を見習って欲しいものだ」
ウェンディやチンクも苦笑いしている。
「ああ、だがダンテは本当に遠慮って言葉を知らないからな」
ゲンヤは今では飲み仲間であるダンテに皮肉混じりに言った。
「「「確かに」」」
一同がそう頷いていると、
「さて、おかわり欲しい人？」
ディエチがおかわりを持ってきてくれた。
「「「はーい！」」」
それに元気に答えるナカジマ姉妹。
「あ、おとーさん、ギンガ。あたし明日教会の方に行ってくるから」
食事を再開する時、ノーヴェがゲンヤとギンガにそう言った。
「そう」
「いつものお見舞いか？」
「ん、そんなとこ」

「じゃ、あたしも行くッス！セイン姉と双子をからかいに！」

「姉も行きたいな。久しぶりに」

するとウェンディとチンクも賛同する。

「えー！？」

ノーヴェはいきなりの展開に驚く。

「だめよー。あんまり大勢で押し掛けちゃ」

そしてギンガが注意をする。今日も騒がしく過ごすナカジマ家であった。

―――聖王教会本部

「今日もお日様一杯のいい天気だよ。…そうそう、午後にはヴィヴィオとノーヴェ達が会いに来てくれるってさ」

ある病室にて一人の少女…セインがカーテンを開けながら、もう一人の少女に語りかける。

「楽しみだね。イクス」

ベッドで未だ眠りについている少女…イクスヴェリアに向かって…

――翌日、聖王教会本部

「いよーッス！オットー、ディード♪」

「久し振り」

ウェンディとディエチがオットー、ディードに挨拶をする。

「ウェンディ姉様、ディエチ姉様」

「二人ともご無沙汰」

それを見て双子も挨拶を返す。

「他の皆さんは？」

そしてウェンディとディエチの二人を椅子に座らせながら、ディードが聞いた。

「チンク姉は騎士カリムとシスターシャッハんとこ。なんかお話だって」

それにウェンディが答える。

「ヴィヴィオとノーヴェはイクスのお見舞い」

そしてディエチが補足を入れる。

「イクス元気ッスか？」

ウェンディがイクスの状態を聞く。

「健康状態には異常無し。静かにお休みだよ」

「陛下やスバルさんもよくお見舞いに来て下さいますし…きっと楽しい夢を見ておいでなのかと」

――――――――――――――――

「ごきげんよう、イクス。お加減良さそうだね？」

セインとノーヴェが見守る中、ヴィヴィオはイクスの手を握りながら、イクスに話しかけていた。

――――――――――――

同時刻…教会内、カリム・グラシア執務室にて

「お話って言うのは……例の障害事件の事よね？」

とカリムがチンクに用件を聞く。

「ええ、我ながら要らぬ心配かとは思ったのですが」

チンクはそう言いながらモニターを開く。

「件（くだん）の格闘戦技の実力者を狙う襲撃犯…彼女が自称している［覇王］イングヴァルトと言えば――――」

「ベルカ戦乱期……諸王時代の王の名前ですね」

チンクが言いかけた言葉をカリムが繋ぐ。

「はい。時代は異なりますが、こちらで保護されているイクスヴェ

リア陛下や…ヴィヴィオのオリジナルである［最後のゆりかごの聖王］オリヴィエ聖王女殿下とも無縁ではありません」

「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

「無くはないかと…聖王家のオリヴィエ聖王女…シュトゥラの覇王イングヴァルト…ガレアの冥王イクスヴェリア…いずれも優れた［王］達でしたから」

感傷に浸っていると、

「ああ、もちろん。かつての王達は別人ではあるんですが…」

とチンクが言い改める。　そしてわかっているように

「ええ、それを理解しない者もいるという事ですよね」

とカリムが言った。そこでシャッハがこう言った。

「とはいえ［覇王イングヴァルト］は物語にも現れる英傑です。単なる喧嘩好きが気分で名乗っているだけという可能性も大きいですよ」

「……ですね」

それを聞いてチンクは納得する。

「でも犯人が捕まるまでイクスの警戒は強化するわ。セインについてもらいましょう。……ヴィヴィオについては」

「それはこちらで…私と妹達がそれとなく。それにギンガがバルダに依頼したので大方大丈夫かと」

――――――――――――

「みんなごきげんよう～♪」

ヴィヴィオが皆に挨拶をする。

「ああ、これは陛下」

それに気づいた双子がヴィヴィオに近づく。

「陛下。イクス様のお見舞いはもう？」

「うん、ディード。いっぱい話したよ」

ディードの問いに笑顔で答えるヴィヴィオ。

「あたしらは戻るけどおまえらは？」

ヴィヴィオ達が会話している中、ノーヴェがウェンディとディエチに聞いた。

「あーあたしも」

するとウェンディは自身も戻るため椅子から立ち上がった。

「私はもう少し」

ディエチはもう少しここに残るようだ。

「陛下。よろしければこれを…自信作のビスケットです」

オットーがヴィヴィオに自作のビスケットを渡す。

「わ♪ありがとオットー♪かわいいー♪」

ヴィヴィオはそれを喜んで受け取った。

「んじゃ、あたしは三人を送ってくるなー」

セインは双子にそう言いながらヴィヴィオ達を出口まで案内した。

――――――――――――

セインがヴィヴィオ達を出口まで案内している時、ノーヴェがおもむろにこう言った。

「しかしいいのかヴィヴィオ。双子からの陛下呼ばわりは」

「え？」

それにヴィヴィオはキョトンとする。

「前は〔もーっ陛下って言うの禁止ーーっ〕とか言ってたろ」

ノーヴェの言いように納得する。そして、

「あー、まあもう慣れちゃったし、あれも二人なりの敬意と好意の表現だと思うし」

と言った。

「あいつらなんかズレてっからなぁ」

呆れたようにノーヴェは言う。すると出口付近まで行き、セインが口を開く。

「この後はいつもの［アレ］か。ん？ウェンディもやるんだっけ？」

そしてウェンディに聞くと、ウェンディは少し笑いながら

「ま、二人にお付き合いッス」

と言いながらヴィヴィオ達の所へと戻っていった。

お見舞い（後書き）

バルダの依頼話は、自分の力量ではまだまだ先ですね……トホホ……

ストライク・アーツ（前書き）

ここからちょびっと原作と違ってきます。

ストライク・アーツ

ミッドチルダ　中央市街地

「あ！」

「リオ！コロナ！おまたせー！」

ヴィヴィオがリオとコロナに駆け寄る。
そして、ノーヴェとウェンディが歩きながら続く。

「こんにちはー」

「おう、こんにちは」

「こんにちはッス」

コロナ達が挨拶をしていると、

「リオは二人と初対面だよね？」

ヴィヴィオがリオにノーヴェ達に自己紹介していないかを聞いた。

「うん」

リオはそれを2つ返事で返し、そしてノーヴェ達に自己紹介をする。

「はじめまして！去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりま

した。リオ・ウェズリーです！」

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」

「その妹のウェンディッス♪」

互いにに自己紹介をすると、コロナがノーヴェ達について説明する。

「ウェンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生！」

「よ、お師匠様！」

「コロナ。先生じゃないっつーの！」

コロナの説明の後、ウェンディがからかう。ノーヴェは顔を赤くしながらも否定する。

だが逆に、

「先生だよねー？」

「教えてもらってるもん」

「先生って伺ってます！」

と肯定するヴィヴィオ達。リオにおいては目をキラキラさせながら握り拳をつくっている始末である。

「ホラ」

ヴィヴィオ達の言葉にやっぱり、というように言うウェンディ。

「うっせ」

ノーヴェは当然と言わんばかりのヴィヴィオ達に少し照れながら言った。

数分後、ストライクアーツ練習場

「でもやっぱ意外〜！ヴィヴィオもコロナも文系のイメージだったんだけどなぁ。初めて会ったのも無限書庫だったし」

おもむろにリオがヴィヴィオ達に意外そうに言った。

「文系だけどこっちも好きなの」

「私は全然初心者レベルだしね」

少し笑いながらリオの問いに答えるヴィヴィオとコロナ。

「ほんとー？」

リオがそう言ってると、

「さ、いくぞー」

既に着替えを済ませたノーヴェがやってきた。

「「「はーい！」」」

そして着替えを済ませ、ヴィヴィオは練習場へと入っていった。

ストライクアーツとは、ミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技であり…広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称である。

「へーー！なかなかいっちょまえッスねぇ」

ヴィヴィオ達の動きを見て、感心するウェンディ。

「だろ？」

そう言うノーヴェはどこか嬉しそうだ。

「でもヴィヴィオ、勉強も運動もなんでもできてすごいよねぇー」

ヴィヴィオとリオが軽く打ち合っているとき、リオが羨ましそうに言った。だがヴィヴィオはこう言った。

「ぜーんぜん！まだなんにもできないよ。自分が何をしたいのか、何ができるのかもよくわからないし…だから今はいろいろやってみてるの」

「そっか」

ヴィヴィオの考えに相槌をうつリオ。

「リオとコロナといろんな事、一緒にできたら嬉しいな」

「いいね！」

「一緒にやってこう！」

三人でそう言ってると、

「さてヴィヴィオ。ぼちぼちやっか？」

ノーヴェが軽くストレッチをしながらヴィヴィオにそう言った。

「うん！さー出番だよクリス！セイクリッド・ハート！セットアップ！」

ヴィヴィオは意気揚々と答え、クリスをセットアップして、大人の姿へとなった。

「すみません。ここ使わせてもらいまーす」

「失礼しまーす」

そうして練習場の広い場所へと移動した。

「なんか二人とも注目されてない？」

多くの人達がヴィヴィオとノーヴェを見ている様子を見ながらリオがコロナに言った。

「二人の組み手凄いからねー。リオもきっとびっくりするよ」

二人がそう言ってる間にも組み手が始まろうとしていた。

「いくよ、ノーヴェ」

「おうよ！」

そうして互いに様子をうかがい…

――バシィィィッ！――

組み手が開始された。
「二人共やるもんッスなぁ」
「はい！」
ウェンディ達がそう言ってる間にもヴィヴィオとノーヴェは凄まじい攻防を見せる。
それはしばらくの間続いたのだった。

――――――――――――――――
「今日も楽しかったねー」
「てゆーかびっくりの連続だよー」
帰り道でヴィヴィオ達が楽しそうに会話していると、
「わりぃ。チビ達、送ってってやってくれるか？」

ノーヴェがウェンディにそう頼んだ。

「あ、了解ッス。…なんかご用時？」

ノーヴェの頼みに了承し、そして怪訝そうに聞くウェンディ。

「いや、救助隊。装備調整だって」

ノーヴェは軽く用件を言い、ヴィヴィオ達に踵を返す。

「じゃ、またな」

「「「お疲れ様でしたー！」」」

――――高町家――――

「ただいまー」

リオとコロナ達と別れ、自宅に戻ったヴィヴィオ。

「おかえりーヴィヴィオ」

帰宅したヴィヴィオをなのはが迎える。

「ママ、これからお風呂？」

「うん。今フェイトママが入ってるからその後にね」

「ほんと？それじゃあヴィヴィオ、フェイトママと一緒に入るー！
……あれ？なのはママ。バルダお兄ちゃんは？」

楽しそうに会話している中、ふいにヴィヴィオがキョロキョロとバルダを探す。

「あー、バルダは昨日ギンガから依頼があってね。その事について動いてるんだって」

―――――――――――――――

ここはミッドチルダ中央市街地のとある道…
普段は人々で溢れる所だが、今は誰もなく、不気味なまでに静かだった。

「ふぅー。救助隊の装備調整してたらもうすっかり暗くなっちまったな」

そんな夜の道を通るのは、救助隊の装備調整を終わらせ、帰路についているノーヴェである。

ノーヴェが一人歩いていると…

「ストライクアーツ有段者…ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

「！」

急に上から声がした。ノーヴェが上を見上げてみると、

「貴方にいくつか伺いたい事と…確かめさせて頂きたい事が」

そこには、バイザーを付けた女性がいた。

「質問すんならバイザー外して名を名乗れ」

ノーヴェは女性にバイザーを外すように言った。女性はバイザーを外しながら自己紹介をした。

「失礼しました…カイザーアーツ正統ハイディ・E・Sイングヴァルト。［覇王］を名乗らせて頂いています」

「噂の通り魔か…」

そう呟きながら構えるノーヴェ。

「否定はしません」
女性…イングヴァルトは地面に着地しながら淡々と言った。
「伺いたいのは、貴方の知己（ちき）である王達についてです。聖王オリヴィエのクローンと冥府の炎王イクスヴェリア」
「……」
ノーヴェは握り拳を作る。
「そして……魔剣士スパーダの血族」
「！」
「貴方はそれらの所在を知っていると……」
「知らねえな」
イングヴァルトが言い終わると、ノーヴェが睨みつけながら言った。
「聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えはねえ……まあ、最後の奴の方はそれを誇りにしていたが。だがな…あたしが知ってのは、一生懸命生きてるだけの普通の子供達だ！」
ノーヴェがそう言うと、
「ほう…なかなか嬉しい事言ってくれるね、ノーヴェさん」

「！」

「お前は…！！」

二人が驚愕した様子でその者を見る。

「バルダ！！」

「や、ノーヴェさんご無沙汰。それと…随分と美人さんになったなぁー…アインハルト」

「！　気づいて、たんですか」

ズバリと言い当てられた事に驚くアインハルト。それを聞いてノーヴェはバルダに問い詰める。

「おいバルダ。知り合いか？」

「ええ、俺と同じクラスメートです。始業式の時俺が屋上で寝てたとき探しに来てくれたんです」

「そっか。つかバルダ…お前またそこで寝てたのかよ。なのはさんに怒られちまうぞー」

屋上で寝てた事に呆れるノーヴェ。

「まあまあ、いいじゃねえの。それよりも…」

バルダは軽く手を振ってノーヴェの注意をかわし、アインハルトの

方に顔を向ける。
「貴方が、あのスパーダの血族ですか？」
おもむろにアインハルトがバルダにそう言った。
「ああ。そうだ」
「そうですか…」
バルダが答えると、アインハルトが構えた。
「防護服と武装をお願いします。バルダさん」
そしてバルダにデバイスをセットアップするよう要求する。
「…ＯＫ．わかった。いいですよね？ノーヴェさん」
それにバルダは応じ、ノーヴェに確認を取る。
「好きにやれ。けど、負けんなよ？」
ノーヴェは不敵に笑いながら軽く了承した。
「よし…ならいくぞアベンジャー、セットアップ！」
〈ＯＫ！スタンバイレディー…セットアップ！〉
そうして、バルダはバリアジャケットを展開した。

「ありがとうございます」

「一つ聞いていいか？何故こんな事をする？」

バルダはアインハルトに何故こんな事をするのか質問した。するとアインハルトは淡々と言った。

「……強さを知りたいんです」

「強さを？」

「はい。そして今よりもっと強くなりたい」

「Ｈｕｍ…だったらこんな事してないで、真面目に練習するとかプロ格闘家目指すとかしろよ。俺はともかく、ノーヴェさん辺りならいいジムなり道場なり紹介してくれるだろうからよ」

「ああ。だから単なる喧嘩馬鹿ならここでやめとけ…今は被害届が出てないからまだいいけど、もし出たらお前を逮捕しなければならなくなる」

ノーヴェが忠告するが…

「ご厚意傷み入ります。ですが私の確かめたい強さは……生きる意味は、表舞台にはないんです。構えてください…バルダさん」

アインハルトの意思は変わらず、バルダに構えるように言った。

「…仕方ねえな。少し待ってくれ……アベンジャー」

〈了解。ＢＡＳＡＲＡモード、セットアップ！！〉

アベンジャーがそう言うと、凄まじい光がバルダを包み込んだ。

ストライク・アーツ（後書き）

はい。最後にアベンジャーの新しい機能が発動しましたね。…名前からしてバレますよねーコレ。

ＢＡＳＡＲＡモード起動！覇王との戦い（前書き）

ＢＡＳＡＲＡモードの技名は原作のものをそのまんま使用しています。
主人公紹介にＢＡＳＡＲＡモードと、付け忘れてたレアスキル…スペルハングルを追加しました。
後、前作の誤字等を修正しましたので多少は読みやすくなっているはず…です。もし「知ってるよ～」な人はこれをスルーして貰って構いませんよ。
ではどうぞ

ＢＡＳＡＲＡモード起動！覇王との戦い

バルダを包んでいた光が止み、そこには

〈ＢＡＳＡＲＡモード…ブレイカー！！〉

「待たせたな。アインハルト」

黄色い袖のないバリアジャケットの上にまた黄色い甲冑を着たバルダがいた。そしていつもは背中に収まっているアベンジャーはなく、素手の状態だった。

「……いきますよ」

アインハルトはゆらりと体を脱力させた後、バルダに向かって突撃してパンチを繰り出す。

「……ッ！（なかなか速いな）」

バルダはアインハルトの動きを観察しながら、攻撃を一つ一つかわしていく。

「どうしました？攻撃しないのですか？」

「ふっ、挑発か…いいぜ。乗ってやるよ！！」

そう言ってバルダは大きく踏み込み、

「天道突き！！」

アインハルトに魔力を圧縮した拳を叩きつけた。

「ッ！！」

アインハルトはすぐさま腕を交差させてガードするが、

「！？」

バルダの天道突きの威力は凄まじく、アインハルトはそのまま吹き飛ばされてしまった。

「……くっ」

そして、なんとか体制を立て直し、バルダを見据える。するとバルダがアインハルトに問い詰めた。

「アインハルト。お前は何故、その拳を振るう？」

アインハルトはそれに怪訝に思いながら

「それは…列強の王達を全て倒し、ベルカの天地に覇を成すこと。そして、スパーダの血族を越えることです」

と言った。

「Ｈｕｍ……無理だな」

「え…！？」

きっぱりと言うバルダに唖然とするアインハルト。

「なぜ…ですか？」

「なぜ？Ｈｕｎ！それはお前がわかってるんじゃないのか？」

「！」

「俺からしちゃあ、お前が心からそう言っているようには見えなかったぜ」

「……これは私の意志です。貴方にとやかく言われる筋合いはありません」

「それはそうだな。確かに俺がどうこう言う筋合いはない……まあいい、話はここまでだ。今度はこっちから行かせてもらうぜ！！」

〈虎牙玄天！〉

バルダは一瞬でアインハルトの懐に潜り込み、ボディーブローを放つ。

「……！（速い！！）」

アインハルトはバルダの予想以上のスピードについてこれず、そのまま虎牙玄天を受けてしまった。

「うぐっ…（なんて攻撃の速さ…そして重さ…！）」

アインハルトが一瞬怯んでいる内に、

〈東風の乱舞〉

「ぼーっとしてる暇はないぜ?!はあああああああああ!!」

バルダが高速の乱打を打ち込んできた。
アインハルトは必死にバルダの攻撃を捌くが、

――ピシッ!―ガッ!――

捌ききれなかった拳がアインハルトを襲う。

「ぐっ!(強い!これが、スパーダの血族!!)」

「オラァッ!!」

――ドガァッ!!――――

「！うあああっ！」

そしてトドメと言わんばかりの威力を持った拳がアインハルトに直撃した。

「Ｈｕｍ…終わったな」

吹き飛ばされたアインハルトを見て踵を返すバルダ。そしてギンガに依頼達成と連絡しようとした時、

「覇王……断空拳」

「！？」

――ドゴオオオン！！――――

「ぐあっ！？」

アインハルトが渾身の一撃をバルダに放った。

それによりバルダは大きく吹き飛ばされ、建物の壁に叩きつけられた。

「はあ……はあ…弱さは、罪です。弱い拳では……誰の事も守れないから」

バルダが建物の壁に叩きつけられたのを見ながら、アインハルトは息絶え絶えながらに言った。だがバルダから受けたダメージは大きく…その場に膝をついてしまう。

「確かに…そうだな…弱さは罪だ。自身の力が弱ければ、大切なものも、何も守れやしない…」

「！！」

アインハルトが驚愕して見ると、

「今のはきいたぜ…なかなかいい拳持ってんじゃねえか」

バルダが不敵な笑みを浮かべながら立っていた。

「……」

だがアインハルトは、内心かなり焦っていた。
全身全霊を持って放った最大の技を受けてなお立ち上がったバルダに驚きを隠せなかった。

「さて、その様子だと限界のようだが…どうする？まだやるか？」

そんなアインハルトをよそに、バルダはそう言った。
その時アインハルトは冷静さを取り戻し、少し考えてたが…

「やめておきます。私の全力の一撃を受けてその様子では、勝てそうにありません……武装形態、解除」

溜め息を吐き、観念したように女性の姿から、元の少女の姿に戻った。

「ふう。勝負あり、だな。さて！事情聴取がしたいから、一緒に来て貰うが…いいか？」

すると今まで静観に撤していたノーヴェがアインハルトに聞いた。

アインハルトはそれに素直に

「はい」

と答えた。

「それじゃ、俺はギンガさんに連絡をするから」

バルダはそう言って立ち去る。

「あの」

「ん？」

するとアインハルトに呼び止められる。

「また、私と戦ってくれますか？」

アインハルトの言葉にバルダは微笑み、

「ああ、いいぜ。同じクラスメートの頼みだしな」

と軽くＯＫした。

こうして、世間を騒がせた連続傷害事件は幕を閉じた。

ＢＡＳＡＲＡモード起動！覇王との戦い（後書き）

東日本の地震については本当に災難でしたね…
被災者の方にはなんと言ったらよいのか…
とにかく希望を持っていただきたいですね。はい

事後処理（前書き）

いやはや、執筆するスピードが遅くなってきた…
これからまた遅くなったりするかもしれませんが、まあ温かい目で見ていってください。

事後処理

バルダと別れ、ノーヴェとアインハルトは、とある人の家の前に来ていた。

「よし、着いたぜ。スバルー！来たぞー！」

ノーヴェが扉を叩くと、

「はーい！」

と元気よく扉を開け、スバルが顔を出した。

「いらっしゃいノーヴェ。それと…」

「アインハルト・ストラトスです」

「そっか。よろしくね、アインハルト。私、スバル・ナカジマっていうの。スバルって呼んでね」

「よろしくお願いします。スバルさん」

互いに自己紹介を済まし、家に入る。

「そういやティアナは？」

家に入りながらノーヴェが聞いた。

「ティアなら明日の早朝には来れるって。さ、あがってあがって」

それにスバルは軽く答えながら家に入るよう促す。

「おじゃましまーす」

慣れたような感じで入っていくノーヴェ。

「失礼しま……！？」

アインハルトも家に入ろうとするが、急に体のバランスを崩す。

「うわっとと！大丈夫？」

スバルが慌てて抱き止める事で、地面とキスする事は免れた。

「どうやらバルダとの戦いのダメージがまだ残ってたみたいだな…今日はもう遅いから、お前はもう休むことだな」

アインハルトの状態を見て、そう推測するノーヴェ。

「すみません…」

「いいのいいの。気にしないで。それにしてもバルダももう少し女の子の扱い方ってものを考えてほしいよね～」

「まあまあ。実はあれでも手加減してたみたいだからよ」

「え？あれで…ですか？！」

思わず目を丸くするアインハルト。

「ああ、現に急所は外れてたろ？それが証拠だ」

「……」

突如知った事実に呆然とするアインハルト。
そして、

「ふふっ」

急にアインハルトは笑いだした。

「「？」」

「あ、ごめんなさい。いや…その、バルダさんは凄いなあっと思って」

恥ずかしながら言うアインハルトを見て、

「「うん、そうだね／ああ、そうだな」」

スバルとノーヴェもつられて笑った。

――――翌日――――

あの後、アインハルト達は特に何もせず、そのまま就寝し、朝を迎えた。

「ん……そうだ。私、スバルさんのお宅にお邪魔してたんだった」

ベッドからアインハルトが起床し、伸びをする。

――――ガチャ――――

「よう。やっと起きたか」

ノーヴェが軽口を言いながら部屋に入ってきた。

「貴方がアインハルトね？」

するとティアナもやってきた。

「そういう貴方はどなたですか？」

アインハルトは怪訝そうに聞く。

「私は本局で執務官をしてる…ティアナ・ランスターといいます。いきなりで悪いんだけど、事情聴取をしてもいいかな？」

「…はい」

「あ、でも簡単な事しか聞かないから大丈夫。心配しないで。それに早く終わるから」「しっかし、カバンの中を見て思ったけど、制服と学生証持ち歩いてっとは随分ととぼけた喧嘩屋だな」

そこで、ノーヴェがからかうように言った。

「…学校帰りだったんです」

アインハルトが顔を赤くしながら言っていると、

「みんなおはよー。おまたせ♪朝ご飯でーす！」

スバルがみんなの分の朝ご飯を持ってきた。

「おお、ベーコンエッグ！」

「あと野菜スープね」

「おはようございます。スバルさん」

「おはようアインハルト。さてと、朝ご飯のついでにさっさと事情聴取を済ませちゃおっか」

スバルは朝食の乗った盆を渡しながら言う。

「スバルー。なんであんたが仕切ってるのかな～？」

「あ、ごめん！ティア！ついうっかり…」

相変わらずの様子の親友に溜め息を吐きながらも、ティアナは話を進めた。

「はあ…まあいいわ。それじゃあ早速確認するけど、格闘家相手の連続襲撃犯が貴方って言うのは本当？」

「……はい」

「理由、聞いてもいい？」

ティアナが理由を聞くとノーヴェが代わりに答える。

「大昔のベルカの戦争がこいつの中では終わってないんだとよ。んで、自分の強さを知りたくて…後はなんだ、聖王と冥王とスパーダの血族をぶっ飛ばしたいんだったか？」

そしてアインハルトに確認を取る。

「最後のは……少し違います。古きベルカのどの王よりも覇王のこの身が強くあること…そしてスパーダの血族を越えること…それを証明できればいいだけで」

「聖王家や冥王家とかに恨みがあるわけではないと？」

「はい」

ティアナの問いに答えると、

「そう。なら良かった」

スバルが安心したように言った。

「…スバルさんは聖王達とはどういう関係なんですか？」

不思議に思ったアインハルトがスバルに聞いた。

「友達だよ。とっても大切な」

スバルはニコッと笑いながら答える。

「あとで近くの署に一緒に行きましょ。被害届は出てないって話だし、もう路上で喧嘩とかしないって約束してくれたらすぐに帰れるはずだから」

そしてティアナが今後の方針を言う。

「あのさ、ティアナ。あたしも一緒に行っていいか？なんかほっとけねえからよ」

ノーヴェも共に行くと言った。

「はい、それじゃあ話はこれでおしまい！冷めちゃう内に朝ご飯を食べちゃおう！」

「「「はい／そうね（だな）」」」

スバルの言葉によって、みんなで朝ご飯を食べ始めたのだった。

――湾岸第六警防署

警防署の待合室にて、スバルとティアナは談話をしていた。

「ごめんねティア。折角の非番なのに」

「それはあんたも一緒でしょ。…しかし、あんたってばベルカの王様とよく知り合うわよねぇ」

申し訳なさそうに言うスバルに軽く答えながら、ティアナは若干呆れたように言う。

「ねー。でもあの子…アインハルトも色々抱え込んじゃってるみたいだし。このまま放ってはおけないかも」

スバルはアインハルトの様子を心配しながら言った。

「でもその前に、あんたの可愛い妹が一肌脱いでくれそうじゃない

？それに――――――――――」

一方、アインハルトはというと…

「……（私は何をやってるんだろう。やらなきゃならない事沢山あるのに）」

警防署の廊下にある椅子に座りながらうなだれていた。
暫くの間そうしていたアインハルトだったが、

「よう」

――――ピタッ――――――

「ひゃっ！！」

誰かにより、意識を現実に戻された。
アインハルトは直ぐにファイティングを取り、相手を見据える。
（だがあまりの慌てように寧ろ可愛く見える）

「！？　何故バルダさんが此処に？！」

その相手はバルダだった。そして両手には缶ジュースを持っている。
バルダは慌てふためいているアインハルトを見て、笑いながら答える。

「まあ、お前の様子を見に来た。それに、サボリは俺の専売特許さ」

「サボるなよ」

――――ごっ！――――――

するとノーヴェがやってきて、バルダにチョップをかました。

「～～～いってーな！ノーヴェさん！危うく頭が割れるところだったぞ！」

「大丈夫。お前はその程度では何ともないから」

「ヒドいね！？なにこの扱い！！」

「さて、もうすぐ解放だと思うけど…学校はどーする？今日は休むか？」

ノーヴェはバルダを軽くスルーしながらアインハルトに聞く。

「うおう！？もはや無視！？」

それにバルダはスルーされた事に衝撃を受ける。

「どうする？」

「（バルダさん大丈夫かな。というか、なんか可愛い…）行けるのなら行きます」

アインハルトは廊下の片隅で少しいじけているバルダを心配（？）しながらも冷静に答える。

「真面目で結構。つーわけでお前もさっさと学校に戻れよ」

「へーいへい。わかりましたよ。まあアインハルトが解放されるまで待つけど」

ノーヴェに言われ、さっきまでいじけていたバルダだったが、直ぐに元に戻り、軽い感じで言った。

するとノーヴェは真剣な表情になり、アインハルトにこう切り出した。

「で、あのよ…うちの姉貴やティアナは局員の中でも結構凄い連中なんだ。古代ベルカ系に詳しい専門家も沢山知ってる。お前の言う［戦争］がなんなのかはわかんねーけど」

そしてアインハルトの顔を見ながら言う。

「協力できる事あんならあたし達が手伝ってやる。だから……」

「聖王達に手を出すな……ですか？」

だがノーヴェの言葉をアインハルトが遮る。

「違ェ（ちげ）よ。あ、いや違わなくはねーけど。つかそんな事言ってっとまたコイツにやられるぞ」

ノーヴェはバルダを指差しながら言った。

「？　それは一体どういうことですか？」

ノーヴェの言葉に疑問を覚えるアインハルト。

アインハルトの問いにバルダは答える。

「単純な話しだ。お前が戦いたいと言っている王の内の一人は、俺の身内で妹だ。まあ血は繋がっちゃいないが、大切な家族だ。そんな家族を勝手に手出しされるのは、俺が許さねえ…」

「……！」

覚悟の籠もったバルダの言葉にアインハルトは何も言えなくなる。

そこでノーヴェがアインハルトにこう言った。

「お前とバルダがやり合ってたのを見て、なんとなくわかるんだ。お前さ、格闘技(ストライクアーツ)が好きだろう？あたしもまだ修行中だけど指導者(コーチ)の真似事もしてっからよ。才能や気持ちを見る目だけはあるつもりなんだ」

「……」

「……違うか？好きじゃねーか？」

ノーヴェの問いにアインハルトは

「好きとか嫌いとかそういう気持ちで考えた事がありません。覇王(カイザー)流(アーツ)は、私の存在理由の全てですから」

どこか悲しそうで、そして自分に言い聞かせるように言った。

ノーヴェはそんなアインハルトの様子を見て、

「……聞かせてくんねーかな？覇王流のこと…お前の国の事…お前がこだわってる戦争の事」

と聞いたのだった。

時を超えての出逢い

一方、バルダ達が警防署にいる頃……

「あったあった！これがオススメ。［覇王イングヴァルト伝］と［雄王列記］。あとは当時の歴史書！」

そう言って、コロナはヴィヴィオに本を数冊渡す。

「ありがと、コロナ！」

「前にルーちゃんにオススメしてもらったんだ」

「でもどーしたの？急にシュトゥラの昔話なんて」

するとリオが怪訝そうに聞いた。

「うん。ノーヴェからのメールでね、この辺の歴史について一緒に勉強したいって」

ヴィヴィオはその問いに答える。

その後思い出したようにこう言った。

「あ、それから今日の放課後ね！ノーヴェが新しく格闘技やってる子と知り合ったから、一緒に練習してみないかって」

――とある喫茶店にて

「二人共、折角の休暇だろ？別にこっちに付き合わなくてもいーのに」

ノーヴェはスバルとティアナにそう言う。

「アインハルトの事も気になるしね」

「そうそう」

二人はあくまで協力するつもりのようである。

「まーそれはありがたくもあるけど。問題はさ――」

ノーヴェはそれに感謝しつつ後ろを向き、

「なんでお前らまで揃ってんのかってことだ！」

チンクを除く、ウェンディ、ディエチ、オットー、ディードの元ナンバーズ姉妹に向けて言った。

「えー別にいいじゃないッスかー」
「時代を超えた聖王と覇王の出逢いなんてロマンチックだよ」
「陛下の身に危険が及ぶことがあったら困りますし」
「護衛としては当然」
各自の意見を言う姉妹に
「すまんなノーヴェ。姉も一応止めたのだが」
とチンクは申し訳なさそうに言った。
「うぅ」
チンクに言われ、ノーヴェは仕方なく引き下がる。
「まー見学自体はかまわねーけど、余計な茶々は入れんなよ？ヴィヴィオもアインハルトもお前等と違っていろいろ繊細なんだからよ」
そしてノーヴェは半ば諦めたようにウェンディ達に言った。
「「「はーーーい！」」」
それに元気よく答えるウェンディ達。
「ノーヴェ！みんなー！」

「「こんにちはー！」」
そしたらヴィヴィオ達が合流してきた。
「あー、やかましくてわりぃな」
「ううん、ぜんぜん！」
「で、紹介してくれる子って？」
ヴィヴィオは周りをキョロキョロと見ながらノーヴェに尋ねる。
「さっき連絡あったからもうすぐ来るよ」
「何歳くらいの子？流派は？」
「お前の学校の中等科の一年生で、お前の兄貴のクラスメート。流派はまあ……旧ベルカ式の古流武術だな」
「へー！」
「あとアレだ。お前と同じ虹彩異色」
「ほんとー！？」
目を輝かせるヴィヴィオに
「まあヴィヴィオ、座ったら？」
「そうそう」

とスバルとティアナが言った。

「あ…そうですね！」

気づかぬ内にはしゃいでいた事に、ヴィヴィオは恥ずかしがりながら座ろうとする。

すると、

「失礼します。ノーヴェさん、皆さん。アインハルト・ストラトス…参りました」

「俺もいるぜ」

バルダとアインハルトがやってきた。

「すみません、遅くなりました」

「いやいや。遅かねーよ」

謝るアインハルトを宥めるノーヴェ。

「あ、お兄ちゃん。どうしてここに？」

ノーヴェがアインハルトを宥めている時、ヴィヴィオが聞いた。

「いや～あの担任の先生に課題出されちゃってさ。それでさっさと終わらした後帰ろうとしたら、あいつがこれからお前達の所に行くから一緒に来てくれないかって言われてな？そういう事でついて来

た」

アインハルトを指差しながら説明するバルダ。

「そうなんだ」

ヴィヴィオが相槌をうつとノーヴェがこちらに向き、紹介する。

「でな、アインハルト。こいつが例の」

「えと…初めまして！ミッド式のストライクアーツをやってます。高町ヴィヴィオです！」

そう言って、ヴィヴィオは握手をしようと手を差し出す。

「（この子が…）ベルカ古流武術、アインハルト・ストラトスです」

アインハルトも手をとり、握手する。

「（小さな手…脆そうな体…だけどこの紅と翠の鮮やかな瞳は、覇王の記憶に焼き付いた…間違うはずもない聖王女の証）」

そして確かめるようにヴィヴィオと聖王との特徴を述べていく。

「あの、アインハルト…さん？」

どうやら深く考えすぎてしまったようだ。

ヴィヴィオが心配そうな表情でアインハルトを見ている。

「…ああ、失礼しました」

「あ、いえ！」

二人でそんなやり取りをしていると

「まあ二人とも格闘技者同士、ごちゃごちゃ話すより手合わせした方が早いだろ。場所は押さえてあるから早速行こうぜ」

とノーヴェが提案した。その後ヴィヴィオ達は区民センターにあるスポーツコートへと移動した。

———数時間後…

そしてスポーツコートにて、トレーニングスーツに身を包んだヴィヴィオとアインハルトが向かい合っていた。

「じゃああの、アインハルトさん！よろしくお願いします！」

「……はい」

突然だが…ここで前回の話の最後の所に遡る―――――

■■■■■■■■■■■■

「……聞かせてくんねーかな？覇王流のこと…お前の国の事…お前がこだわってる戦争の事」

「………諸王戦乱の時代…武技において最強を誇った一人の王女がいた。名をオリヴィエ・ゼーゲブレヒト…後の「最後のゆりかごの聖王」。かつて、覇王イングヴァルトは彼女に勝利する事ができなかった」

「それで時代を超えて再戦………か？」

ノーヴェの問いにアインハルトは首を横に振り、話を続ける。

「そんな彼女でも勝てなかった人がいた…その人こそが―――――」

「魔剣士スパーダってか」

アインハルトの言葉をバルダが続ける。

「はい。戦乱時代の時、突如として現れた悪魔の軍勢……その者達は殺戮の限りを尽くし、当時の人々を恐怖と混沌の渦につき落とし

ました」

「その原因については知ってるぜ。魔の力に魅せられた人々がその力を得るため、人間界と魔界を繋げる塔…テメンニグルを造った。だが悪魔共は逆に人間界を征服するためにテメンニグルを利用し、人々を襲った」

「そうです。彼等に対抗するため、各国の王達が集結し連合軍を築きました。ですが…それでも悪魔達の力の前に為す術がありませんでした。もう終わりだと誰もがそう思ったそんな時でした。悪魔達の中に反逆者が現れたのです。その者は巨大な片刃剣を用いて悪魔達を倒していきました。その者こそ…後に伝説と謳われる存在になった、魔剣士スパーダ。スパーダの戦う様を見て、人々は彼と共に戦う決意をしました。そして数年…数多の犠牲を払いましたが、スパーダは魔界の王と魔界そのものを封印する事に成功しました。その後、スパーダは人間界に居続け、世界を旅して回ったといいます」

ここで、一端話を区切るアインハルト。

「なる程な…けど、スパーダが旅に出た後はどうなったんだ？」

怪訝そうにノーヴェはアインハルトに聞いた。

するとアインハルトの表情に悲しみの色が出る。

「実はスパーダが旅に出た後は暫くは平和だったんですが…数年の後に、また戦が起こり、再び争いの日々が始まりました」

「「！！」」

「オリヴィエとイングヴァルトは、そんな戦を一刻も早く終わらせるために戦いました。スパーダが守った人々の命をこれ以上散らさないために……
あとは歴史書に載ったとおりです」

「「……」」

「覇王の血は歴史の中で薄れていきますが、時折その血が色濃く蘇る事があります。碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色。覇王の身体資質と覇王流…それらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいます。私の記憶にいる［彼］の悲願なんです。天地に覇をもって和を成せるそんな王であること…」

次第にアインハルトの目には涙が出始める。

「弱かったせいで…強くなかったせいで…彼は彼女を救えなかった……守れなかったから！そんな数百年分の後悔が…私の中にあるんです。だけど、この世界にはぶつける相手がもういない…救うべき相手も守るべき国も世界も……！」

そして遂にはアインハルトは泣き出してしまった。

「……」

――――トッ……――――――

「……え？」

「いるよ」

するとバルダがアインハルトの肩に手を置き、

「お前の拳を受け止めてくれる奴がちゃんといる」

と優しく語りかけたのだった。

■■■■■■■■■■■■

「（本当に？この子が覇王の拳を、覇王の悲願を受け止めてくれる？）」

そう願い、アインハルトは目の前にいるヴィヴィオを見据える。

「んじゃ。スパーリング４分、１ラウンド。射砲撃とバインドはナシの格闘オンリーな」

ノーヴェの言葉に頷く二人。

「レディー、ゴー！」

こうして、スパーリングが開始された。

時を超えての出逢い（後書き）

あれ？なんか途中から題名と内容が違ってきてる？まーいっか。

対戦…その後（前書き）

一応投稿っと。今回はかなり短いです。
え？戦闘？…ノーコメントでお願いします。

対戦…その後

「レディー、ゴー！」

ノーヴェの掛け声が言い終わる。

さっきまでトントンとステップを踏んでいたヴィヴィオだったが、

――――ゴウッ！――――

一瞬の後にアインハルトに向かって打ち込んだ。アインハルトはそれを受け止める。

――ドッ！―ガッ！―ガッ！―ガッ、ガキン！――――

その後はヴィヴィオが攻め続け、アインハルトはそれを防ぐという状態が続いた。

「ヴィ…ヴィヴィオって変身前でも結構強い？」
その様子を見て、思わずティアナはそう言った。
「練習頑張ってるからねぇー。バルダも付き合ってあげてるんでしょ？練習」
「まあね。まだまだ伸びるよ。ヴィヴィオは」
スバルの問いに、バルダは嬉しそうに答えた。

「はっ！」
「ッ！」
ヴィヴィオの蹴りをかわすアインハルト。
「やあっ！」
そこからジャブ、アッパーなどと、怒涛の攻撃を繰り出す。
「……」

アインハルトはただ冷静にヴィヴィオの攻撃を受け流したり、かわしたりしてヴィヴィオの動きを見据える。

「……（まっすぐな技。きっとまっすぐな心。だけどこの子は…だからこの子は…）」

――――フッ……――――――

するとアインハルトは体を低く身構え、

「（私が戦うべき［王］ではないし……）」

「！」

そして手で押し出すようにして、ヴィヴィオを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたヴィヴィオをオットーとディードが受け止める。

「す……（すごい！！）」

さっきのアインハルトの攻撃を受けてみて、凄いっと顔を輝かせるヴィヴィオ。

だが、逆にアインハルトの心境は暗かった。

「（私とは違う）」

そう自己完結させると、アインハルトはヴィヴィオに背を向ける。

「お手合わせ、ありがとうございました」

それはスパーリングの終了を示すものだった…

「あの…あのっ！！すみません。私、何か失礼を？」

いきなり背を向けるアインハルトに慌てて聞くヴィヴィオ。

「いいえ」

「じゃ…じゃあ、あの私……弱すぎました？」

オドオドと言うヴィヴィオにアインハルトはこう言った。

「いえ［趣味と遊びの範囲内］でしたら充分すぎるほどに……

…申し訳ありません。私の身勝手です」

アインハルトの言葉にヴィヴィオは顔を暗くする。それでも必死に

「あのっ！すみません…今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！今度はもっと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか？今日じゃなくてもいいです！明日でも来週でも！」

と言った。その様子を見かねたノーヴェが

「あーそんじゃまあ…来週またやっか？今度はスパーじゃなくてちゃんとした練習試合でさ。バルダもそれでいいだろ？」

と提案し、

「いいと思いますよ」

バルダもそれに了承する。

「ああ、そりゃいいッスねえ」

「二人の試合、楽しみだ」

ノーヴェの提案に楽しそうに乗るウェンディとディエチ。

「……わかりました。時間と場所はお任せします」

その様子を見て、アインハルトも了承する。

「ありがとうございます！」

これにて、この場は解散となった。

『わりぃ、ヴィヴィオ。気ぃ悪くしないでやってくれ』

別れる時、ノーヴェは申し訳なさそうに謝る。

『全然！私の方が［ごめんなさい］だから！』

だがヴィヴィオは逆に自分が悪いと言うように言った。そして帰っていくノーヴェ達を見送った。

その後、リオやコロナ達と別れ、帰路につく。

「ねえ…お兄ちゃん」

「ん？」

家に帰る途中、ヴィヴィオに声をかけられた。

その様子は何処か暗い…

「私…がっかりさせちゃったのかな…アインハルトさんを。あの人からしたら、私はレベル低いのに不真面目だから…」

いつも明るいヴィヴィオだが…先のスパーリング以降、表情に明るさは無く、影が差していた。

「ヴィヴィオ」

そしてバルダはヴィヴィオがこれ以上言う前に止める。

それから励ますように言った。

「そう自分を卑下するな。お前は強いよ。まあ相手がちょっと特殊だっただけだ」

「でも…」

まだ渋っているヴィヴィオ。

「…Ｈｕｍ．だったら帰ったら特訓だな」

「え？特訓？」

いきなりの提案にキョトンとするヴィヴィオ。

「そ。来週の練習試合に向けてさ」

軽くウィンクしながら答えるバルダ。

「それに伝えたいんだろう？お前の本気の気持ちを」

「あ…」

バルダの言葉にハッとするヴィヴィオ。

「その為にもまずは特訓だ。ほらほら、いつもの明るいヴィヴィオはどうした？落ち込むなんてらしくないぜ」

優しく微笑みながら、ヴィヴィオの頭を撫でるバルダ。

「……ありがと。バルダお兄ちゃん」

その後、しばらくして漸く家に着き、なのはと夕食を食べたのだった。

激突…そして、はじめまして（前書き）

やっと、投稿できた…ではどうぞ

激突…そして、はじめまして

「今日はありがとうございました」

スバルとノーヴェと別れる時、アインハルトは二人に礼をした。

「また明日連絡すっから」

「何か困ったことがあったらいつでもあたしたちにね」

スバルとノーヴェはそれに気軽に答える。

「じゃあ、車で送ってくるから」

「うん」

そうして、ティアナとアインハルトはこの場を去っていった。

「ねーノーヴェ。アインハルトの事も心配だけどさ…ヴィヴィオ、今日の事ショック受けたりしてないかな？」

二人が行った後、スバルがノーヴェに不安そうに聞いた。

「そりゃまあ多少はしてんだろうけど。さっきメールが来てたよ。あたしの修行仲間はやっぱりそんなにヤワじゃねー。まあバルダがフォローしてくれたんだろうけど。それに、今からもう来週目指して特訓してるってよ」

一方そのヴィヴィオはというと、

――ガッ！――バシッ！――ガッ！――ガガガガッ！――

今はバルダに組み手の相手をしてもらっていた。

「攻撃が単調すぎる！もっとキックやフェイントを組み合わせた攻撃をしてみろ！そうすれば相手に動きを読まれにくくなる！」

そしてバルダはヴィヴィオの攻撃を軽く捌きながらアドバイスをする。

「はい！」

そう言ってヴィヴィオはバルダに言われた通りにキックやフェイントをしながら攻撃する。

「よし、いい攻撃だ。それじゃあ今日はこれまでにしようか」
その後二人は軽く休憩し、ヴィヴィオにアドバイスをしたあと、家に戻って行った。

■■■■■■■■■■■■■■■

「クラウス、今まで本当にありがとう。だけど私は行きます」
辺りの大地を焼き尽くす火の海を背景に、金髪でオッドアイの女性が、地面に膝をつけている男性…クラウスにそう言った。
「待ってくださいオリヴィエ！勝負はまだ……！」
それに対し、クラウスは待つようにと言った。
「貴方はどうか良き王として国民と共に生きてください。この大地がもう戦で枯れぬよう、青空と綺麗な花をいつでも見られるような…そんな国を」
だがオリヴィエは自分の思いをクラウスに託し、彼女はクラウスに

背を向け、歩み始めた。

「待ってください！まだです！！ゆりかごには僕が……！！」

クラウスの必死の叫びを聞いても、歩みを止めないオリヴィエ。

「オリヴィエ！！僕は……！！」

クラウスの思いも虚しく、オリヴィエは彼の前から立ち去っていった…

「くそっ！くそっ！！」

オリヴィエが立ち去った後、クラウスはただただ地面に拳を叩きつける。

その行為は何分にも及び…既に彼の手は砕け、血だらけだった。

「守れなかった……！彼女を！！やはり…僕ではダメなんでしょうか…？」

そしてクラウスは灰色に染まった空を見上げ、

「スパーダ様…」

かつて、自分達人間の為に剣を振るい、見事巨悪を打ち倒した伝説の魔剣士に向けて問いかけた…

■■■■■■■■■■■■

「――――――ハッ！」

突如目を覚ますアインハルト。ふとその眼には涙があった。

「（いつもの夢。）」

アインハルトは鏡台の前に立ち、

「（一番悲しい、覇王「わたし」の記憶…）」

そして悲しい表情を浮かべながら力無く拳をぶつけた。

区民公園　ＡＭ　６：０８

「アインハルトの事、ちゃんと説明しなくて悪かった」

ランニング中、ノーヴェが唐突にヴィヴィオに謝った。

「ううん、ノーヴェにも何か考えがあったんでしょ？」

ノーヴェの謝罪に対して、ヴィヴィオは特に気にしていないって感じで答える。

その様子を見てノーヴェは安堵し、ヴィヴィオに休憩をしようと呼びかける。

そしてアインハルトの事について説明し始めた。

「あいつさ。お前と同じなんだよ。旧ベルカ王家の王族――――［覇王］イングヴァルトの純血統」

「…そうなんだ」

「あいつも色々迷ってんだ自分の血統とか王としての記憶とか。…でもな、救ってやってくれとかそーゆーんでもねーんだよ。まして聖王や覇王がどうこうとかじゃなくて」

「わかるよ。大丈夫」

ヴィヴィオはノーヴェの言葉を途中で遮る。

「でも、自分の生まれとか、何百年も前の過去の事とか、どんな気持ちで過ごしてきたのかとか、伝え合うのって難しいから、思い切りぶつかってみるだけ。仲良くなれたら教会の庭にも案内したいし」

そう言って、軽くパンチを繰り出すヴィヴィオ。

「ああ。あそこか…いいかもな」

ノーヴェはヴィヴィオのパンチを受け止めながらも賛同する。

「悪いなお前には迷惑かけてばっかりで」

すると今度は申し訳なさそうに言った。

だがヴィヴィオはこう言った。

「迷惑なんかじゃないよ！友達として信頼してくれるのも、コーチとして私に期待してくれるのも、どっちも凄く嬉しいもん。だから頑張る！」

―――――――――――――――

アラル港湾埠頭の廃棄倉庫区画……そこに、ヴィヴィオ達はいた。

「お待たせしました。アインハルト・ストラトス、参りました」

そこへ、スバルとティアナに連れられてアインハルトがやって来た。

「来ていただいてありがとうございます。アインハルトさん」

「……」

そう言って頭を下げるヴィヴィオを悲しげに見つめるアインハルト。

『……ノーヴェさん』

その様子を見かねたバルダがノーヴェに念話を送る。

「『ああ。わかってる』ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし許可も取ってあるから安心して全力出していいぞ」

「うん。最初から全力で行きます。セイクリッド・ハート…セット・アップ！」

「……武装形態」

そして、二人は戦闘態勢を整え、指示を待つ。

「今回は魔法はナシの格闘オンリー五分間一本勝負」

「それじゃあ、試合――――――――開始ッ！！」

こうして、試合が始まった。

「……（綺麗な構え……油断も甘さもない）」

アインハルトはヴィヴィオと対峙してみて、そう感じた。ヴィヴィオも油断せずアインハルトの様子を窺っている。

「（いい師匠や仲間に囲まれて、この子はきっと格闘技を楽しんでる。私とはきっと何もかもが違うし、覇王（わたし）の拳（いたみ）を向けていい相手じゃない）」

そう思い、アインハルトは静かに構えた。

「（凄い威圧感…一体どれくらいどんな風に鍛えてきたんだろう。勝てるなんて思わない。だけど、だからこそ一撃ずつで伝えなきゃ）」

「（「この間はごめんなさい」と。）」

そしてヴィヴィオとアインハルトはほぼ同時に打ちかかった。
だがスピードはアインハルトが上だったからか必然的にアインハルトが先手を打った。

ヴィヴィオはそれを両手をクロスさせて防ぐ。

アインハルトはそのまま攻めの手を緩めず、ヴィヴィオはそんなアインハルトの攻撃をかわし、受ける事で隙ができるのを待っていた。

そして遂にその時は来た…

「シッ！」

「（私の全力…）」

ヴィヴィオはアインハルトの攻撃を身を屈める形でかわし、

「（私のストライクアーツ！！）」

アインハルトに渾身の一撃を叩き込んだ。

「っ！」

それによりアインハルトは吹き飛ばされる。

ヴィヴィオはアインハルトに追撃を加えた。
だがそれはアインハルトに防がれる。

「（この子は———）」

そして今度はアインハルトが反撃した。

「うっ！」

ヴィヴィオはその攻撃をまともに受けてしまう。

「〜〜〜ッッ！！」

――ガゴォッ！！――

だがヴィヴィオも負けじとアインハルトにカウンターを見舞った。

「……」

それでもアインハルトの闘志は揺るがない。

「はぁぁあっ！」

ヴィヴィオが叫びながらアインハルトに拳を振るう。

「（この子はどうして、こんなに一生懸命に――？）」

アインハルトは、必死に拳を振るうヴィヴィオに困惑していた。

「（師匠が組んだ試合だから？友達や自分のお兄さんが見てるから？）」

一方ヴィヴィオはこう思っていた。

「（大好きで大切で、守りたい人達がいる…小さな私に強さと勇気を教えてくれた…世界中の誰より幸せにしてくれた…強くなるって約束した…）」

「あああぁっ！！（強くなるんだ）」

そしてヴィヴィオは

「（どこまでだって！！）」

全ての力を込めた拳をアインハルトにぶつけた。

……だが

――バキン！――バキ！――――ビキ！――ビキ！――――

「！」

「覇王断空拳」

――ドゴォォォン！――――

アインハルトの覇王断空拳が、ヴィヴィオを吹き飛ばした。

「一本！」

その様子を見て、ノーヴェは静かに宣言した。

「「ヴィヴィオ！！」」

「「陛下！」」

リオとコロナ、オットーとディードがヴィヴィオに駆け寄る。

「きゅ～～」

そこにはバリアジャケットは解け、目を回して気絶しているヴィヴィオがいた。ディードがヴィヴィオを膝枕をしながら介抱し、ヴィヴィオの様子を見る。

「どうです？ディードさん」

ヴィヴィオを心配したバルダがディードに聞いた。
「怪我はないようです…ご安心を」
ディードの言葉に安堵するバルダ。
「アインハルトが気をつけてくれたんだよね。防護(フィールド)を抜かないように」
「ありがとッス、アインハルト」
「「ありがとうございます」」
「俺からも礼を言うよ。ありがとう」
「ああ、いえ」
礼を言う一同にアインハルトは戸惑ってしまう。
すると、
「……！？」
「あらら」
アインハルトは急にバランスを崩し、ティアナに倒れ込んだ。
「す、すみません。……あれ！？」
「ああ、いいのよ。大丈夫」

そしてアインハルトはすぐさま退こうとするが、どういうわけか、体が思うように動かない。
その様子を見て、ノーヴェが説明する。
「ラストに一発カウンターがカスってたろ。時間差で効いてきたか」
ノーヴェの説明を聞きながらもアインハルトは何とか動けるよう心掛ける。
「だ、大丈夫……大丈夫、です」
そう言ってティアナから離れるが、
「！」
「よっと！」
またバランスを崩し、スバルが抱き止めた。
「いいからじっとしてろよ」
「そのまま、ね♪」
ティアナとノーヴェが優しく呼びかける。
「……はい」
アインハルトは顔を赤くしながら答えた。

「断空拳はさっきのが本式か？」

するとノーヴェがアインハルトにそう聞いた。

「足先から練り上げた力を拳足から打ち出す技法そのものが［断空］です。私はまだ拳での直打と打ち下ろしでしか撃てませんが」

「なるほどな。――――で、ヴィヴィオはどうだった？」

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼な事を言ってしまいました。――――訂正します、と」

「そうしてやってくれ。きっと喜ぶ」

「ま、それだと今までの特訓は無駄じゃなかったってことだな」

「はい。（彼女は覇王（わたし）が会いたかった聖王女じゃない。だけど［私］は、この子とまた戦えたらと思っている）」

アインハルトは、そう思いながらヴィヴィオの下へと歩み寄り、手を握った。

「はじめまして…ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

「それ起きてる時に言ってやれよ」

「ははっ！確かに。そうしてくれたらヴィヴィオも喜ぶと思うよ」

「……恥ずかしいので嫌です」

バルダとノーヴェの言葉を恥ずかしそうに返すアインハルト。

「どこかゆっくり休める場所に運んであげましょう。私が運びます」

「「はい！」」

こうして、聖王、覇王、スパーダの血族が再び出逢った。

これが、彼等の鮮烈な物語の始まりである。

激突…そして、はじめまして（後書き）

漸く単行本でいう一巻が終わった～。

あ、Ｖｅｒｇｉｌさん。感想どうもありがとうございます。確かにダンテは天上天下唯我独尊のような人ですが、ここのダンテは妻であったマリア（前作、Ｓｔｏｒｙ６　追憶　後編参照）にぞっこんだったんで、ナンパはしないです。まあけど破天荒や自由奔放なとこは変わりませんけどね～。

ダンテはいつか勿論登場させますんで、皆さんも首を長くして待っていてください。

長くなってしまいましたね。ではまた会いましょう

朝の登校

――タッ――タッ――タッ――――タッ――タッ――――

「ゴールッ！」

日課であるランニングを終え、家に到着したヴィヴィオ。

そうして家に入っていった。

「ママ、ただいま！」

「「おかえりー」」

朝ご飯の準備を終えたなのはとフェイトがヴィヴィオを迎えた。

「ふあー。あー眠っ」

すると、バルダも眠そうだがリビングにやって来た。

「「おはようバルダ（お兄ちゃん）」」

「おはよー。みんな早起きで凄いなー。俺には到底できないよ」

「にゃはは。バルダは朝に弱いね」

ニコニコ笑いながら言うなのは。

「そうだね。昔のなのはみたい♪」

「フェ、フェイトちゃん！？」

フェイトの言葉に何故か顔を赤くするなのは。

「へぇ～母さんがね～。ねえねえフェイトさん。その事について詳しく――――」

バルダがフェイトに問いつめようとしたら、

「バ～ル～ダ～？少し…アタマ…冷やしてみる…？」

と、なのはが目のハイライトを消しながらそう言ってきた。

「…すんませんでした（泣）」

あまりの剣幕に涙目になりながら謝るバルダ。

「わかればいいんだよ♪バルダ♪さ、ヴィヴィオは早くシャワーを浴びておいで。ランニングで汗かいたでしょ」

先程のプレッシャーはどこへやら。

元の表情に戻ったなのはがヴィヴィオにそう言った。

「はーい！」

ヴィヴィオは元気よく返事し、リビングを後にした。

そしてシャワーを浴びて、制服に着替えた後、皆で朝ご飯を食べたのだった。

「じゃあフェイトママ」

「いってきます」

「ゆっくりと寛いで下さいね」

「うん。いってらっしゃい」

「そういえばバルダ、ヴィヴィオ。新しいお友達、アインハルトちゃんだっけ？ママにも紹介してよ」

家を出て、おもむろになのはがバルダとヴィヴィオに言った。

「んー、お友達っていうか先輩だからねー。もっとお話したいんだけど、なかなか難しくて……」

「物静かな子だからな～、あいつ」

バルダとヴィヴィオはなかなか上手くいかないっといったような感じで答える。

なのはは微笑みながら

「そっか。ならもっと頑張って仲良くならないとね」

と言って、

「それじゃあ、私はこっちだから」

バルダ達とは別方向に歩いて行った。

「あ…！アインハルトさん！」

学校に到着し、ヴィヴィオはアインハルトを見つけた。

そしてすぐさまアインハルトへと駆け出していった。

「ごきげんよう、アインハルトさん！」

「ごきげんよう、ヴィヴィオさん」

「おはよう、アインハルト」

「おはようございます。バルダさん」

バルダも追いついて、アインハルトと挨拶を交わす。

その後、雑談しながら校内を歩いていく。

するとアインハルトが、

「ヴィヴィオさん。あなたの校舎はあちらでは？」

と、ヴィヴィオのいるべき校舎である初等科の方角を指差しながら言った。

「あ…そ、そうでしたっ！」

今まで気づかなかったのか、ハッとするヴィヴィオ。

「それでは」

「あ」

アインハルトは踵を返す。

「ありがとうございます。アインハルトさん」

「遅刻をしないように気をつけてくださいね」

アインハルトを礼を言うヴィヴィオに背を向けたまま手を振る。

「はいっ！気をつけます！！」

それにヴィヴィオは満面の笑顔で言った。

「ふふっ。んじゃまたな、ヴィヴィオ」

二人の様子を静かに見ていたバルダも、ヴィヴィオに背を向け、アインハルトの下に向かった。

「うん！またねっ！バルダお兄ちゃん！」

そうしてヴィヴィオは初等科にある自分の教室へ走っていった。

「……」

「どうした？アインハルト」

急に振り返ったアインハルトを怪訝そうに見るバルダ。

アインハルトは走り去って行くヴィヴィオを見ながら呟いた。

「…いい妹さんですね、バルダさん」

その言葉にキョトンとしていたバルダだったが、すぐ笑顔になり、

「ああ。自慢の妹だ」

と嬉しそうに言った。

ＭＩＳＳＩＯＮ１　護衛　前編（前書き）

これから先出てくる［ＭＩＳＳＩＯＮ］は本編とは違う、所謂番外編という事になります。ここではバルダがどんな風に依頼をこなしているか、というのが主ですね。

とまあそんな感じで［ＭＩＳＳＩＯＮ］編…スタートです。

ＭＩＳＳＩＯＮ１　護衛　前編

ここは、時空管理局によって管理されたとある管轄街……

そこには様々な人達が暮らしていた。

その中に、ぽつんと建っている一つの建物があった。

建物の看板には大きくこう書かれている…

――Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙと――

――コッ…――コッ…――――――コッ…――コッ…――

するとそこへ、銀髪で赤いロングコートを羽織った少年がやってきた。

――――ガチャ…――――

少年はＤｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙに入っていった。

「さあ、開店だ」

Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ二代目店主…高町バルダの便利屋稼業の開幕である。

「さて、今日はどんな依頼がくるかな？」

そう言いながら肘掛け椅子に腰掛けるバルダ。

〈退屈だなー。最近大したことない依頼ばっかだったからなぁ〉

暇そうに声を上げるのは、バルダの相棒のデバイス…アベンジャーである。

「まあまあ。依頼があるだけでもいいじゃないか。依頼さえなければ、俺達はただこうやって暇を持て余して退屈な時間を過ごすことになるんだし」

バルダは退屈そうに言っているアベンジャーを宥める。

〈けどよ。最近受けた依頼は、工事の手伝いや落とし物探しとか…拍子抜けするような依頼ばっかりだぜ?!〉

「そう言うな。依頼が何時だってそのようなものばかりじゃない…そうだろ?」

〈まあ、そうだけどさ〉

まだ渋っているが、納得するアベンジャー。

「依頼が来るまで気長に待とうぜ。…そうだな、ピザでも作っとくか」

そう言ってると、

――――ガチャ――――――

「失礼。ここがＤｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙで間違いないかな？」
茶髪で、スーツに身を包んだ三十代半ば程の男性が入ってきた。
その姿はどこか紳士を思わせる雰囲気を持っていた。
「そうだよ。ここが便利屋…Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ。そして俺が店主の高町バルダです。では、どうぞこちらへ」
バルダは男性に自己紹介をし、そして男性に来客用のソファーに座るよう促す。
バルダの言われた通りにソファーに座り、男性も自己紹介する。
「どうも。…では私も自己紹介をしよう。私は、レウス・クリフォードという者だ」
バルダはその名前に少し驚いた表情をする。
「ほう、これはこれは。かの有名なクリフォード財閥の……して、唯のしがない便利屋に何の用ですか？」
そしてニヒルな笑みを浮かべながらレウスに問いかける。
レウスは神妙な顔で言った。
「実は近々、私が主催するパーティーがあってね…その時に私の娘の護衛をして欲しいのだ」

「娘？貴方に娘さんがいたのか？」

「ええ、名はクレア。私が今まで愛情込めて育ててきた、大事な娘だ。パーティーにはテロリストなどが乗り込んでくるかわからないからね。是非、君にボディーガードを頼みたい」

そう言ってレウスは頭を下げる。
バルダは少しの間（といっても一秒にも満たない）思案していたが…すぐに考えをまとめ、

「わかりました。受けましょう」

と、引き受けた。

―――――――――――――――

レウスの依頼を引き受けたバルダは、レウスに連れられ、今は目の前にそびえ立つ超高層ビルにいた。

「ここが私の家だ」

「ほえ～、でかいな～」

あまりの大きさに呆然としているバルダ。

そうして、中に入っていく……

「「「お帰りなさいませ！！レウス様！！」」」

するとレウスの従者の人達が一斉に頭を下げながら、主人を出迎える。

「ああ、出迎えご苦労。すまないがライはいるか？」

「ここにおります。旦那様」

レウスの下へ、年輩の老人がやって来た。

「バルダ君、紹介しよう。ウチの執事長を努めてもらっている、ライだ」

「お初お目にかかります、バルダ様。私はライと申します。この度は旦那様へのお力添え…ありがとうございます」

そう言って礼をするライ。

「いえいえ、俺達便利屋は依頼が無いと本当にひｍ……じゃなくて、何もすることが無いので、お安いご用ですよ」

バルダは苦笑いしながら答える。
するとレウスがこんな事を言った。
「これからパーティーが始まるまで3日間…君には少し覚えてもらいたい事がある」
「？それは何ですか？」
怪訝そうに聞くバルダ。
「それは……君に執事としての仕事を覚えて貰う」
「……へ？」
唐突な事に唖然とする。
そして訳が分からずレウスに問い詰める。
「あの、レウスさん？何故執事の仕事を覚えなければいけないんですか？！」
「ほんの少しの時とはいえ、君は我等の一員になったのだ。これ位は当然だ」
と、レウスはさも当然と言わんばかりに言ってきた。
そして異論は認めないという感じでバルダを見る。

「（これは俗に言う、強制イベントってやつか……）はあ、わかりましたよ。やればいいんでしょ、やれば」

半ばやけくそ気味に言うバルダ。

「よろしい…ではライよ。後は頼んだ」

「かしこまりました。さあバルダ様、早速始めましょう。私が一流の執事にして差し上げましょう」

「（どうしてこうなった？）」

こうして、何故かバルダの執事修行が始まった。

MISSION1　護衛　前編（後書き）

ここで一旦区切ります。申し訳ない…

ＭＩＳＳＩＯＮ１　護衛　後編（前書き）

あれ？途中からおっかしいな？まあいいや。ではお待たせしました。
ご覧ください。

MISSION1　護衛　後編

バルダの執事修行が始まって早二日……

あれからバルダは、ライによって過酷な訓練を受け、今では一流の執事へと成長した。

「初めて見た時からただ者ではないと思っていましたが、まさかこれほどとは……」

と、長年執事をしてきたライでも目を見張る程の成長スピードだったらしい。

そして今は修行を終え、パーティーまで残すところあと1日になったので護衛する人である…レウスの娘クレアと会うのであった。

―――――――――――――――

「さて、バルダ君の執事修行も済んだことだし…そろそろクレアと顔合わせでもしようか」

「わかりました、レウス様」深々と頭を下げるバルダ。

「うんうん、バルダ君の執事姿も様になってきたね～。にしても、たった二日でライから免許皆伝をもらうとはね…」

バルダの覚えの良さに驚きを隠せないレウス。

「はい…私もこれほどまでの一材を見たのは初めてでございます」

ライもレウス同様、驚いていた。というよりも、一番バルダの側でその成長を見ていたのだから当然である。

「まったくだ、便利屋にしておくには勿体ないよ。ねえバルダ君。よかったらここで働かないか？」

勧誘してくるレウスにバルダは、

「申し訳ありません。私めはたくさんの人達の手助けがしたい故…その申し出はお断りします」

と意志の籠もった言葉でレウスの申し出を断った。

「そうか…残念だ。ではライ、バルダ君をクレアの下まで案内して

くれ。バルダ君、クレアの事、よろしく頼むよ」

「「かしこまりました。旦那様」」

「こちらが、クレアお嬢様のおられる部屋にございます」

「案内ありがとうございます。ライさん」

「いえいえ。では、私はこれにて失礼致します」

「はい」

そうして、ライは去っていった。

「……よし、いくか」

バルダは気合いを入れ、扉をノックする。

「どうぞ」

中から気品ある女性の声がした。

バルダは扉を開け、部屋に入っていく。
そこにはレウスと同じく茶髪で、腰のあたりまで伸ばした女性がいた。
バルダはまず自己紹介を始める。
「はじめまして、クレアお嬢様。私は高町バルダと申します。この度は「ああ、無理してその話し方で話さなくていいわよ」――――はい？」
バルダの言葉を途中で遮るクレア。
「どうせお父様やライにそうするよう仕込まれたのでしょう？Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙの店主さん」
そう言って、クスクス笑うクレア。
「……ははっ、全てお見通しというわけか…流石クリフォード財閥のお嬢様。恐れ入ります」
バルダは観念したように言うと、芝居っぽく礼をする。
「茶化さないで。えーと、依頼内容は大方私の護衛って取っていいのよね？」
「そういう感じになると思います」
「そう。まあ、なにがともあれ…よろしくね、バルダ」
「はい。よろしくお願いします。クレアお嬢様」

「ふふっ。私の事はクレアでいいわよ」

「わかりました。クレアさん」

その後はクレアの身の回りの世話をしたり、楽しく談笑していたバルダであった。

パーティー当日……すっかり仲良くなったバルダとクレアは今、

「スリーカード」

ポーカーをしていた。

「どう？クレアさん」

自分の手札を見せ、相手の様子を窺うバルダ。

「ふふっ、私の勝ちね。フルハウスよ」

だがクレアは不敵に笑い、自分の手札を見せる。

「くっそー！また負けた！」

「弱いわね～バルダ。もう私の勝ち越しよ？」

「うぅ…どうして勝てないんだ？」

悔しそうにするバルダ。

まあその理由は大いに実の父親にあるわけだが…

――――――――――――――――――――

「へっくしゅ！ん？誰か噂してんのか？」

「どうした？」

「いや、何でもねぇよゲンヤ。ほら、さっさとカードの続きをやろうぜ。次こそ勝ってやるからよ」

「いやそれは無理。絶対」

と、ある二人の父親の会話があったとか……

――――――――――――――――――――

「さて、じゃあ今度は何を着て貰おうかしら？」

その一言でバルダの表情が凍りつく…

「あ、あの…やっぱり着なきゃ駄目ですか？」

顔が引きつったまま、クレアに問いかけるバルダ。

「そうよ。それに…貴方に拒否権は無いでしょ？負けたんだから」

クレアはピシャリとバルダの意見を切り捨てる。

ちなみにクレアの後ろには、色んな種類の服（女物）を持ったメイドさん達がズラリと並んでいた。

…それもいい笑顔で。

追記しておくと、今のバルダの格好は赤と白が折り混ざったドレスを着ている状態である。

「あ、俺、お手洗いに行ってきます」

「あら、それはさっきも行ったわよね。体調は大丈夫なの？」

「…いえ、大丈夫です……ああっ！俺、執事の仕事をしないと…」

「仕事の事なら他の執事やメイド達がちゃ～～んとやってくれてるから大丈夫よ？それに……」

そう言ってクレアは立ち上がり、

「これも仕事って事で、ね？」
服をちらつかせながら笑顔でバルダに迫る。
「うぅ…」
バルダはクレアから一歩ずつ下がる。
だが…

――――ガシッ――――――

「なっ！？」
後ろを振り返ると、そこにはバルダの肩をがっちりと掴んで離さないメイドさん達がいた。
「ふふふっ。逃がさないわよ？バルダ」
そして身動きが取れないバルダをよそに、着々と近づくクレア。
そして笑顔でこう言った。
「さあ、楽しい楽しいお着替えタイムの始まりよ」

「いやあああああああああああああああああああ！！」

――――数十分後……――――

「……もうやだ…こんなの……」

「「「きゃーー！」」」

「すっごく似合ってるわ、バルダ」

結局の所、バルダはクレア達によって着せ替え人形にされ、顔は羞恥に染まっていた。

そんでもって今は、着せ替えはひとまず終了し、皆でバルダの格好を観賞中である。

「うーん、バルダは基本何でも似合うから、服の選択が迷っちゃうのよね～。あ、写真撮った？」

「完璧でございます。お嬢様」

クレアに聞かれたメイドは恍惚な表情をしながら答える。

「ちょ…なに写真撮ってるんですか！？」

写真を撮られたことに憤慨しながら、バルダはメイドの手に持っているカメラを奪おうとする。

だがカメラは他のメイドの下に投げ渡される。

「くっ、この…」

その時である

「クレアお嬢様。パーティーに赴く準備が……」

ライが偶然部屋に入ってきたのは…

「……」

「……」

「……」

「し、失礼しました…どうぞごゆっくり」

そう言ってライは出て行った。

「ちょっとーー!?なんか変な誤解して出てっちゃったよ?!ライさーーん!!待ってーーー!!待ってくださーーーーい!!!!」

その後、バルダは必死にライに事情を説明して、なんとか事なきを得たのだった。

「あはははははっ!!」

車の中、レウスの笑い声が響き渡る。

「いや〜ポーカーで負けた罰ゲームで女装させられて、写真を撮られた挙げ句…その様子をライに見られるなんてねぇ〜〜、あはははははっ!!」

「笑い事じゃありませんよ!!物凄く恥ずかしかったんですから!!」

大笑いのレウスにバルダは顔を赤らめながら言った。

「まあまあ、バルダ。とても可愛かったわよ?男の子とは思えないくらい」

クレアは愉快そうに笑いながら言った。

「元はといえばクレアさんのせいでしょう！」

「あら、罰ゲームをやろうって言ったのは貴方よ？」

「うっ…」

「まあ落ち着きたまえバルダ君。ほら、パーティー会場が見えたぞ」

レウスが指差すと、そこにはパーティー会場と思わしき、立派な建物が見えた。

その後、車から降り、バルダ達は建物の中に入っていった。

それからは様々な所で活躍している有名な企業やスポンサーがやって来て、その後レウスがパーティーを開催したのだった。

パーティーが開催されて数時間…

「バルダ、そこの飲み物を取って頂戴」

「はい、クレアさん」

バルダとクレアは何事もなくパーティーを楽しんでいた。

ちなみにレウスはライを引き連れ、他の企業の社長達と何やら話し合っている。

「にしても、結構な人がいますね～」

周りを見渡しながら、バルダは言った。

「そうね。けどお父様は有名な人だから、色んな方が呼ばれていても可笑しくないんじゃないかしら」

クレアは淡々と言った。

バルダは「それもそうか」と相槌を打つ。

「（けどおかしいな…そこそこ有名な会社の社長さんとかをちらほらと見かけたが、全く知らない奴もいた…レウスさんがそんなどこの者かわからないような奴を招待するとは思えない。となると…）」

バルダが思案を巡らせていると…

――ズドオオォオン！――

「動くな！」

突如パーティーを親しんでいた男性が拳銃を空中に発砲しながら叫びだした。

それは他の所でも行われ、瞬く間に会場は乗っ取られた。

「バルダ…」

クレアが不安げにこちらを見る。バルダは不敵に笑いながらクレアを安心させるように言った。

「心配しなさんなクレアさん。まあ、ちょっと待ってなよ」

そう言ってバルダは魔力を周りへ垂れ流す。

「おい！なにしてる！」

しばらくして、バルダの様子に気づいたテロリストの一人がバルダに駆け寄る。

バルダは不敵な笑みを浮かべたまま

「Ｓｗｅｅｔ　ｄｒｅａｍ．（ねんねしてな）」

テロリストを吹き飛ばした。

「な、なんだ！？」

「どうした！」

仲間が吹き飛ばされた事で他のテロリスト達も駆けつけた。

「貴様！管理局か！？」

「管理局？Ｈａ！Ｈａ！残念だが、俺はただのしがない便利屋だぜ！！」

そう言ってバリアジャケットを展開するバルダ。

そして、目にも留まらぬ早さでテロリストの一人の懐に飛び込み、拳を見舞い、気絶させた。

「くっ、相手は一人だ！取り囲めッ！」

テロリスト達はなかなかの連携ですぐにバルダを取り囲んだ。

「Ｈｕ～．思ったよりはやるようだ」

「これでもう逃げられないぞ」

「へっへっへ。覚悟しろよ、クソガキぃ」

「すぐに殺してやる」

テロリストに囲まれてもなお、バルダは不敵な笑みを崩さない。

そんなバルダの態度が気に入らないのかテロリスト達はドスを聞かせた言い方で言った。

「おい、テメェ…今の状況わかってんのか？」

「いいや、全然。それよりもあんたらは――――――」

「死ねぇぇ！！」

バルダが言い終わるより早く、テロリストの一人がバルダに向けて銃を発砲した。

――――キィン！――――――

「なに！？」

だが男の放った銃弾はバルダには届かず、［何か］によって弾かれた。

「貴様！一体何をした！」

「それより人の話を最後まで聞け。テメェ等…次元犯罪組織の［パージ］だな？」

それを聞いたテロリスト達は観念したように、

「ああ、俺達はパージの一員だ」

と白状した。

「そうか、やはり…じゃあ一応聞くが、今回の目的は…ここにいる人達の財力だな？」

「そうだ。ここにいる金持ちどもの財力を手に入れれば…質量兵器やロストロギアも手に入り放題だからな」

思いのほか素直に喋るパージの者達に怪訝そうな表情を浮かべるバルダ。

「ほう…意外だな。こうも簡単に目的を言うとはな」

「まあな。何故ならテメェは……」

パージの者達はニヤリと笑い、

「「「ここで死ぬからだぁぁぁぁぁぁ！！」」」

マシンガンやショットガンを乱射させた。

「「「……ッ！」」」

あまりの轟音に耳を塞ぐ他の一同。

しばらく銃弾の嵐は続き、それは弾が無くなるまで続いた。それに

より、バルダのいた周辺は砂塵が立ち込めていた。
そしてようやく弾が尽き、パージの者達が弾をリロードしながらバルダの様子を見る。
「これだけ撃ち込んだら流石に死んだだろ」
「ああ、今ごろ肉塊と化してるだろーぜ」
男たちがそう言ってると、
「誰が死んだって？」
「「「！！？」」」
と、男たちの前から声がした。
砂塵が消え、そこには…
「全く…やってくれるね。コートが滅茶苦茶になったらどうするんだ？」
軽口を言いながら、無傷のバルダが現れた。
「「「……」」」
一方、パージの者達は唖然としていた…そりゃ、もう殺したと思った人間が無傷で出てきたのだから当然である。
「貴様、一体何をした？」

そしてやっとの思いでバルダに問いかける。

「何って、俺はただ自分の魔力を周りに張り巡らせただけだぜ？それに、ありがとよ。あんた達がもたついててくれたお陰で……」

そう言ってバルダは手を上に振りかざし、

「ここの空間はもう俺の領域だ」

手を振り降ろした。

するとどうだろう…

「ぐべらッ！？」

「な、なんだ！？」

「体が動かねえ！？」

パージ達が地面に叩きつけられたのだ。

訳が分からないっていった様子のパージ達…

そこでバルダは説明をする。

「スペル・ホールド…俺のレアスキル、［スペルハングル］によってあんた達を捕捉して、地面に叩きつけた。相手が悪かったな…大人しく縄につきな」

バルダの説明が終わった所で、パージの一人が聞いた。

「お前は…一体何者だ？」

バルダは不敵な笑みを浮かべ、自己紹介をする。

「俺はＤｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ店主…高町バルダだ」

それを聞いたパージの者達は驚愕する。

「なっ！？まさか、［あの］Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙの！？」

「恐らくあんたらが言っているのは…前店主であり、俺の父であるダンテの事だろう。だがな、父さんの力はちゃ～んと受け継いでるから安心しな。とまあ、そう言うことだから…とっとと寝ろ」

そうしてバルダは魔力弾をパージの者達にぶつけ、気絶させた。

その後、管理局が到着してパージの一同はまもなく逮捕された。

そして時は過ぎ、翌日…

「世話になったね。バルダ君」

「いえ、こちらこそ」

そう言ってバルダとレウスは握手する。

「ライさん。執事の仕事という貴重な体験…ありがとうございました」

「はい。またここに来られたとき…必ずや歓迎いたしましょう」

「ありがとう、ライさん」

そうしてライとも握手する。

「バルダ。今回はありがとね。他の会社の社長さん達も礼を言ってたわ」

クレアはバルダに礼を言いながら、握手をする。

「それは何より。まあまた困ったことがあったらウチに来なよ。歓迎するぜ」

「ええ、その時はありがたく寄らせてもらうわ」

「はい、これからもどうぞご贔屓に。では、また会いましょう」

MISSION COMPLETE!!

おまけ

「ねえ、なのはママ。何か届いてるよー？」

「本当だ。何だろ？これ」

この後にバルダに降りかかる出来事はまたのお話…

旅行（前書き）

とりあえずできたので…
ではどうぞ

旅行

ヴィヴィオが教室に着き、リオとコロナと談話した後…

「ていうかー…今日も試験だよー！大変だよー！」

「そうなんだよね～～！！」

試験勉強をやっていた。

「でも試験が終われば土日と合わせて４日間の試験休み！」

「うん！楽しい旅行が待ってるよー」

「宿泊先も遊び場ももう準備万端だって！」

「「おおー！」」

「よーし、じゃあ楽しい試験休みを笑顔で迎えるためにっ！」

「目指せ１００点満点！」

「「「おーーー！！」」」

一方、バルダ達は…

「なあ、アインハルト」

「…何ですか？バルダさん」

バルダの呼びかけに、今呼んでいる教科書から目を上げる。

「試験が終わった後、土日含めて４日間の試験休みがあるだろ？で、そん時にみんなでちょっとした旅行に行こうって事になってな。ヴィヴィオや母さんやノーヴェさん、他のみんなも来るからお前もどうかなって思ってさ」

「旅行、ですか……」

旅行と聞いてなんだか困惑しているアインハルト。

すると

「ですが、私なんかがバルダさんや皆さんと一緒に行っても良いのでしょうか…」

そう言って渋るアインハルト。

「はは、大丈夫だって。寧ろヴィヴィオなんかは飛んで喜びそうだぜ？」

バルダは微笑みながらアインハルトを宥める。

「それに」

「それに？」

怪訝そうに聞くアインハルトにバルダは不敵な笑みに変え、こう言った。

「もう一人のスパーダの血族に会えるぜ？」

――――ピクッ――――――

バルダの言葉にアインハルトは敏感に反応した。

「…その方は一体」

「ああ、その人は俺の実の兄だ。それに、旅行は旅行でも唯の旅行じゃあない。みんなで［ちょっとした］オフトレーニングをやる。

それに魔導師ランクＡＡからオーバーＳのトレーニングも見られる…後歴史に詳しくてお前の祖国のレアな伝記本とか持ってる子がいるし…まあ騙されたと思って来て見なって」

不敵な笑みを浮かべるバルダに、

「（もう一人の…スパーダの血族……）」

アインハルトは自然と握り拳をつくる。

「で、どうする？」

しばらくアインハルトは黙っていたが…

「わかりました。私も行きます」

と了承した。

それを聞いたバルダは、

「そっか♪」

と笑顔で答えた。

――――高町家――――――

「エリオ、キャロ。そっちはどう？」

［はい。さっき無事に引き継ぎが終わりました］

［予定通り週末からお休みです！］

「そう、よかった♪」

安堵したように言うフェイト。そしてなのはが身を乗り出しながら言う。

「じゃあ予定通りにみんなで行けるね。春の大自然旅行ツアー＆amp;ルーテシアも一緒にみんなでオフトレーニング！」

――――ナカジマ家――――――

「みんなで旅行あたしも行きたかったッス～～～！ノーヴェとスバルだけってズルいッス～～！」

なにやらジタバタと騒いでいるウェンディ。

「あー、うるせーな」

それをうるさそうに流すノーヴェ。

「あたしらだって別に遊びに行くわけじゃねー。スバルはオフトレだし、あたしはチビ達の引率だ」

「とかいって、通販で水着とか川遊びセットを買ってるのをおねーちゃんが知らないとでも？」

そう言ってディエチはおそらく水着や川遊びセットが入っている箱を取り出す。

「なんだ。そうなのか」

チンクは悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「！！！お前、人のもの勝手にッ！！」

「いや発送データに中身書いてあるし」

そうして慌てたノーヴェがディエチから箱をかっさらう。

「まあいいじゃない。ノーヴェはバイトも救助隊の研修も頑張ってるんだし」

「まったくだ」

「だから遊びじゃねーって」

「そういえばあの子……アインハルトも一緒か？」

ふとチンクがノーヴェに尋ねる。

「そうだよ。まあ、今頃バルダが誘ってくれてるだろ」

――――――――――――

そうして、そんなこんなで試験期間も無事に終わりを告げ…待ちに待った旅行の日がやってきた。

「試験終了お疲れ様」

「みんな、どうだった？」

なのはとフェイトがバルダ達に苦労の言葉をかける。

「花丸評価いたたぎました！」

「四人そろって」

「優等生ですッ！」

「Ｔｏｏ　ｅａｓｙ．このメンツなら当然でしょ」

とバルダ達は各自の成績表を見せながら言った。

「わー。みんなすごいすごーいっ」

「これならもう堂々とお出かけできるね！」

それを見てなのはとフェイトは拍手しながらバルダ達を賞賛する。

「じゃ、リオちゃんコロナちゃんは一旦お家に戻って準備しないとね」

「「はいっ」」

〈頑張りましたね〉

「ありがと。レイジングハート」

「お家の方にもご挨拶したいから車出すね」

「あ、じゃあ準備すませて私も行く！」

そう言って、立ち上がろうとするヴィヴィオ。

だがなのははそれを止める。

「あーヴィヴィオは待ってて。お客様が来るから」

「お客様？」

怪訝そうな表情をするヴィヴィオをよそにレイジングハートが知らせる。

〈いらっしゃったようです〉

――――ガチャ――――――

「こんにちは」

「アインハルトさん！？…とノーヴェ！」

「異世界での訓練合宿とのことでバルダさんにお誘い頂きました。同行させていただいても宜しいでしょうか？」

「はいっっ！もー全力で大歓迎ですっ！」

アインハルトの言葉にヴィヴィオは大喜びで賛同する。それはもう凄い凄い。アインハルトの手を握ってまた凄い速度で上下にブンブン振っているからその喜び様はわかるだろう。

「……？…バルダさんに？」

だが、ふとアインハルトの言葉に違和感を感じた。

「……あっ！」

アインハルトの言葉の意味を理解したヴィヴィオは

「お～～に～～い～～ちゃ～～～～～ん！！？」

すぐさまバルダの下へと向かった。

そして、バルダに問い詰める。

「お兄ちゃん！なんで教えてくれなかったの！！」

凄い剣幕で言い寄るヴィヴィオ。

するとバルダは

「だってその方が面白いだろ？」

と、悪戯が成功した。やった！みたいな顔をしながら言った。

「それに――――」

バルダは微笑みながらこちらを見ているフェイトに目配せする。

フェイトはそれをすぐに理解し、

「ほらヴィヴィオ、上がってもらって」

と助け舟を出した。

「あ、うん！」

フェイトに言われ、我に戻ったヴィヴィオはアインハルトの所へ戻り

「アインハルトさん。どーぞ！」

と恥ずかしそうに顔を赤くしながらアインハルトに上がるように促す。

「……」

だがアインハルトは先頃のようなやり取りなどに慣れてないのだろう、呆然としていた。

「あの？アインハルトさん？」

そんなアインハルトを心配そうに見つめるヴィヴィオ。

それによってハッとするアインハルト。

「ハッ…！い、いえ。大丈夫です！行きましょうかヴィヴィオさん！」

そして慌てたようにヴィヴィオにそう言った。

「はい！じゃあ行きましょう！」

こうしてヴィヴィオとアインハルトはリビングに向かった。

―――――――――――――――

「ね？アインハルトが一緒に来るの教えなくてよかったでしょ？」

ヴィヴィオ達がいなくなった所で、バルダが愉快そうに笑った。

「本当だね」

「まったくだ」

フェイトとノーヴェもヴィヴィオのあのテンパりように微笑んでいた。

そりゃあもう微笑ましそうに、

「んじゃ、俺達も行きますか」

「うん／ああ」

談笑が終わった後、バルダ達もリビングへと向かったのであった。

―――――――――――――――

バルダ達がリビングに戻ると、

「「こんにちはー」」

「はい！」

リオとコロナがアインハルトに挨拶をし、ヴィヴィオはなんか椅子をパンパン叩き、アインハルトが座りやすいようにしていた。
そしてなのははアインハルトに歩み寄り、自己紹介をしていた。

「はじめまして…アインハルトちゃん。ヴィヴィオとバルダの母です。ウチの子達がいつもお世話になっています」

「いえ…あの、こちらこそ」

なのはの柔らかな雰囲気に思わず畏まるアインハルト。

「格闘技強いんだよね？凄いねぇ」

「は…はい…」

「ちょ、ママ！アインハルトさん物静かな方だから！」

「えー？」

そう言って渋々引き下がるなのは。

「さて、ここから出発するメンバーはみんな揃ったし…途中で二人の家によってそのまま出かけちゃおうか」

「「「はぁーーい！」」」

「だがヴィヴィオ。お前まだ服着替えてないだろ。早く着替えて来な」

「あ、そうだよヴィヴィオ。着替えて来なくちゃ！」

「あーそうだ！クリス手伝ってッ！」

そうして、ヴィヴィオはぱたぱたと自身の部屋へと戻っていった。

「まったく、ヴィヴィオは」

落ち着きの無いヴィヴィオに呆れるバルダ。

「まあまあ、バルダさん。…けどバルダさんはいいんですか？それに準備とか」

呆れるバルダを宥めつつ、コロナはバルダにそう聞いた。

「俺？俺は準備とかはとっくに終わらしたぞ。それに今着ている制服も脱げば私服だし」

バルダはそう言いながら制服を脱ぐ。すると、赤黒い半袖のシャツにジーンズを着た状態になる。

そして、制服を洗濯機へと放り込みに行った。

「賑やかになりそうですねー」

「ああ」

「そういえばスバルさん達は別行動なんですか？」

ふと、リオがノーヴェに聞いた。

「スバル達とは次元港で待ち合わせ。ちょうど仕事終えてる頃じゃねーかな」

――湾岸警備隊　隊舎――同　特別救助隊オフィス―

「それでは司令！」

オフィスの中、ハキハキとした女性の声が響く。

「スバル・ナカジマ防災市長。本日只今より４日間の訓練休暇に入ります！」

ハキハキとした女性…スバルが上官に敬礼をしながら言った。

「おう、頑張ってこいや。今回の訓練は例の執務官殿と、あの蒼穹の神風も一緒だったか？」

「はい。ランスター執務官とギルバー二等陸尉と一緒に色々鍛え直してきます」

――本局　次元航行部３オフィス――――――――

「オフトレとはいえ…本格的な戦闘訓練はちょっと久しぶりよね」

ここでは、黒い執務官服に身を包んだオレンジ色の髪をした女性…ティアナがオフィスにある椅子に座っていた。

「気合い入れなきゃ！バルダやヴィヴィオ、アインハルト達にダメな所は見せられないし！…それにアイツも来るから、模擬戦の時に盗める技術があるか見ないと！」

〈はい、マスター〉

そう言って意気込むティアナ。

だがすぐに慌てた様子でデスクに向かい合い、

「でもその前にこのデータ整理を終わらせなきゃ」

と、キーボードを叩くティアナ。

〈頑張りましょう〉

彼女のデバイス…クロスミラージュの機械音がオフィス内に響き渡った。

――武装隊　第7班オフィス――――――――――――

「では隊長。行って参ります」

綺麗な金髪をオールバックにした青年が顔の至る所に傷がある、まさしく歴戦の勇士を思わせる男に言った。

「うむ、存分に励むがいいぞ。そして思いっ切り羽を伸ばしてこい。班については気にするな…いいな？」

威厳を持った言葉に青年は

「はい。わかりました」

と敬礼をする。

「ははは…相変わらず堅い奴だ。では、行ってこい。ギルバー」

ゼンは青年…ギルバーの様子に苦笑いしながら言った。

「はい。ギルバー二等陸尉。これより訓練休暇に入ります」

そう言ってギルバーはオフィスを後にした。

「さて、みんなと合流するために…行くとするか」

ギルバーは次元港で皆と合流するため、歩き出した。

――無人世界カルナージ　アルピーノ家――――――

モニターの前にて、なのはとメガーヌが旅行の打ち合わせをしてい

た。

「じゃ、それで人数確定ね」

［はい！お世話になります。メガーヌさん］

「いいえ～♪じゃ、待ってるわね～」

アルピーノ家の外にある平原…そこにはルーテシアがいた。

「ふふ、うふふ。ねえガリュー。私、自分の才能がちょっと怖いかも」

そう言って、自身の召還獣に語りかける。

「なんといっても今回のおもてなしは過去最高！レイヤー建造物で組んだ訓練場は陸戦魔導師の練習に！我が家の横に建築した宿泊ロッジも内外ともパワーアップ！掘ったら出てきた天然温泉も癒やしの空間にノリノリで改造ッ！！」

その後も彼女の演説は続く。

更には家の屋根に登り、こう叫ぶ。

「完璧！元機動六課の皆さんもヴィヴィオ達も！我が家にどーーーーんとおいでませーーーーー！！」

するとそこへ…

「ルーテシア～。スープの味見手伝ってー」

メガーヌがルーテシアに呼びかける。

「はーい、ママ」

ルーテシアはそれを引き受け、家に戻っていった。

一方…バルダたちは、今次元港へ向かうため、車に乗っていた。

「アインハルトさん。４日間よろしくお願いしますね」

みんなで旅行について話題になっている中、ひょこんとヴィヴィオはアインハルトに体を傾けて言った。

「はい。軽い手合わせの機会などあればお願いできればと」

「はい！！こちらこそぜひッッ！」

アインハルトの言葉にパァッと顔を輝かせるヴィヴィオ。

するとふとアインハルトはバルダの方へ向き、

「もちろんバルダさんもですよ？」

「……！」

と言った。

バルダはそれに目を丸くするが、フッと笑い

「ああ、その時はよろしく頼むよ」

と穏やかに言ったのだった。

――――次元港――――

ロビーの椅子にて、一人の青年が座っていた。

「…さて、そろそろ誰か来るかな？」

青年が先ほどから読んでいた本を閉じながら言った。

「おーい！ギルバー！」

すると、髪を短く切った、ボーイッシュな感じの女性が青年に走り寄る。

「来たか、スバル。お前は相変わらずだな。もう少し落ち着いてられないのか？」

ギルバーは苦笑いしながらスバルにそう言った。

「あははー…ごめんごめん」

スバルは頬をかきながら申し訳なそうに言った。

その後二人で少し雑談をしていると、

「あら？もう二人とも来てたんだ」

ティアナも合流してきた。

「ようティアナ。久しぶりだな」

「ええ、最近どうも忙しくてねー」

「遅れた理由も何か書類の整理とか？」

「そうなのよ～。おかげで休暇を取るのにどれだけ時間かかったか…」

「ティアも大変なんだね～」

「大変だな」

こうして三人で喋ってると、

「お、三人ともお揃いだね」

「三人とも、元気だった？」

バルダ達一行も合流してきた。

「あ、兄さん。この子があの覇王っ子の――――――」

「はじめまして。お話はバルダさんから聞きました。アインハルト・ストラトスと申します」

「ああ、ご丁寧にどうも。バルダの兄、ギルバーだ。よろしくな、アインハルト」

そう言って、手を差し出すギルバー。

「よろしくお願いします。ギルバーさん」

アインハルトも手を握り返す。

そしてなのはが手をパンッて叩きながら仕切る。

「さて！自己紹介も終わったことだし……そろそろ行こっか！」

「「「はい！！」」」

そうしてバルダ達一行は受付を済まし、ルーテシア達が待つ無人世界カルナージへと飛び立っていった。

オリキャラ設定（前書き）

オリキャラであるギルバーの設定です。といっても前作のやつをコピってちょいっとアレンジしただけですけど…

まあ、無いよりはマシだと思いましたので、ではご覧ください。

オリキャラ設定

ギルバー

容姿…まんまバージル
（ただし髪は金髪）

年齢…１９歳

デバイス…デモリッシュ
（漆黒の日本刀）

性格…冷静沈着

現在武装隊で活躍中。二等陸尉。基本何でもこなすため、隊の中ではかなり重宝されているらしい。その俊足の剣技と高速で敵を倒す様から、次元犯罪者からは「蒼穹の神風」と呼ばれている。
ちなみに、かなり大人びているため歳をよく間違われ、老けているのではと言われるのを気にしている。

常に自分を鍛えている努力家で「毎日が勉強。日々努力」とスローガンを掲げている。
シグナムと同じ様に強い者と戦う事を生きがいとする騎士の面も持つ。技に関してはバージルの技を使っているが、自身のオリジナルの技も持つ。
バルダのストッパーでもある。（主に甘いものの食べ過ぎという意味で）
だが武装隊に入ったことで、その役目はなのはやヴィヴィオになっ

ている。

好きなもの…鍛錬、読書、強い者と戦う事、仲間

嫌いなもの…悪魔

声優…関智一（ＲＡＶＥのハルや戦国ＢＡＳＡＲＡ３の石田三成など）

EXTRA　STEGE　大昔のある日常風景（前書き）

後書きにて、アンケートをとりたいと思います。

では番外編です。

EXTRA　STEGE　大昔のある日常風景

二千年前、それはまだ古代ベルカの戦乱時代……

各国の王が鎬を削っていた。

そんな時、突如として空は黒い暗雲に覆われ……

地面から天を貫かんばかりに巨大な塔が現れた。

その塔からは、おびただしい数の異形の化け物が雪崩のごとく現れた。

異形の化け物たちは、なんと「悪魔」だった……

そして更に、後にわかったことだが…あの巨大な塔を呼び出したのはなんと人間で。悪魔の力を得んとして呼び出したはいいが、逆に利用されてしまい、それで悪魔たちが現れたという。

そうして悪魔たちは、瞬く間に地上を侵略していった。

各国の王とベルカの騎士たちは悪魔たちを打ち倒すべく、悪魔たちと戦った。だが…圧倒的な数の悪魔たちと、強大な魔力を誇る魔界の王とその腹心の上級悪魔たちに、騎士たちは敗れていく…

世界は今、混沌に包まれようとしていた……

皆が諦めかけたその時、一人の悪魔が反旗を翻した。
その悪魔は、強大な魔力を纏った巨大な片刃剣を持って、同胞であった悪魔たちを斬り倒していった…
そんな悪魔を見て、ベルカの騎士たちはこう思った。

――この方と一緒に戦おう、と――――――――――

騎士たちは、その悪魔と共に戦い……遂に魔界の王を退け、悪魔たちに勝利を納めた。
そうして、戦いは終わり…世界に平穏が訪れた。
この話は［ベルカ魔界大戦］と呼ばれ…後々後世に語り継がれていった。

そして、戦いを終局へと導いたあの悪魔はこう呼ばれた――――――

――魔剣士スパーダ……――

――――――――――――――――

「はっ！はっ！はっ！」

とある城にある訓練スペース…そこには一人の青年がいた。

青年はまるで舞を踊っているかのように、拳を振るう。

「今日も訓練に精が出るな。クラウス」

すると訓練場から、銀色の髪をオールバックにした男性がクラウスに歩み寄ってきた。

「スパーダ様！」

クラウスは一旦訓練を止め、彼と向き合う。

「スパーダ様はどうしてここへ？」

「なに、お前のことだからここにいると思ってね」

「そうですか。あ、もし宜しければ僕と組み手しませんか？」

ふと、クラウスがそう提案する。

「ん？ああ、いいぞ。では早速やるとしようか」

スパーダはそれに了承し、二人はすぐさま組み手を開始した。

――――――――――――

「はぁぁっ！！」

「…ふっ！」

――――ガキィィン！――――

「ほう、やるな」

「まだまだっ！」

そう言ってスパーダへと高速で迫るクラウス。

そして、

「覇王断空拳！！」

必殺の一撃を叩き込んだ。それは様々な敵を倒してきた技……

だが相手が悪かった。

「私の前で浅はかに攻撃することは自殺行為だぞクラウス。…［ブロック］」

――ガキィィン！――――

「なっ！？」

クラウスの技は防がれた。

そして、

「はっ！」

「ぐっ…！」

クラウスの鳩尾に拳を叩き込んだ。

それにより、クラウスは膝をつく。

「勝負、ありだ」

「っ……そうですね。ロイヤルガードをもう少し警戒しておくんでした」

悔しそうな顔をするクラウス。

「だがまだまだお前は強くなる。焦ることはない」

「…はい」

するとそこへ…

「クラウスーーー！スパーダ様ーーー！お昼ご飯ができましたよーーーー！！」

金髪で紅と翠のオッドアイの女性…オリヴィエがスパーダ達の所へ駆け寄ってきた。

「そうか。よし、クラウス、オリヴィエ。行こうか」

「「はいっ！」」

そうして、スパーダ達は訓練場を後にした。

EXTRA　STEGE　大昔のある日常風景（後書き）

どうも、ＤｅｖｉｌＳｔｒｉｋｅｒです。

一応活動報告でも書いたんですが、ＭＩＳＳＩＯＮ編（番外編）の話でなかなかいい話が思いつかないので、皆さんからこんな事を書いてほしい、とかリクエストがあれば言って下さい。

いつでもよろしいのでお待ちしています。

力の限り頑張らせていただきます。

到着…そしてトレーニングツアー開始（前書き）

資格試験でかなり手間取ってしまった……先が思いやられるなぁー

お待たせしました、それではどうぞ。

到着…そしてトレーニングツアー開始

無人世界カルナージは、首都クラナガンから臨港次元船で約四時間。
標準時差は七時間。
そして、一年を通して温暖な大自然の恵み豊かな世界である。

カルナージに到着して、バルダ達はアルピーノ家へと向かった。
そして、少し歩くと…
「「みんないらっしゃ～い♪」」
ルーテシアとメガーヌの二人が出迎えてくれた。
「こんにちはー」
「お世話になりまーすっ」
なのはとフェイトが挨拶をする。

「みんなで来てくれて嬉しいわー。食事もいっぱい用意したからゆっくりしてってね」

「ありがとうございます！」

「ルーちゃん！」

「ルールー！久しぶり～！」

「うん。ヴィヴィオ、コロナ」

三人は笑顔で言った。

するとルーテシアはリオの方に向きながら

「リオは直接会うのは初めてだね」

と言った。

「今までモニターだったもんね」

「うん、モニターで見るより可愛い♪」

ルーテシアがリオの頭を撫でながら言う。

「ほんとー？」

リオはそれに照れながら、かつ嬉しそうにして言った。

二人の様子を見て、ヴィヴィオがアインハルトの紹介をする。

「あ、ルールー！こちらがメールでも話した――――」

「アインハルト・ストラトスです」

「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィオの友達、14歳」

「ルーちゃん、歴史とか詳しいんですよ」

「えっへん♪」

コロナに褒められ、胸を張るルーテシア。

「あれ？エリオとキャロはまだでしたか？」

すると、スバルが周りをキョロキョロしながら聞いた。

「ああ、二人は今ねぇ――」

メガーヌが答えようとしたら、

「「お疲れ様でーすっ！」」

エリオとキャロがなにやら薪を持ちながらやって来た。

「エリオ、キャロ♪」

「わーお！エリオまた背伸びてる！」

「そ、そうですか？」

思わず照れるエリオ。

「ほんと…せっかく追いついたと思ったのに、また離されちゃったよ」

そう言って嘆くバルダ。

「あ、あはは…」

バルダの様子を見て、苦笑いするエリオ。

「私もちょっと伸びましたよ！？」

ちなみにそのそばでキャロが必死に訴えていたのはご愛嬌である。

そして、フェイトがアインハルトにエリオとキャロを紹介する。

「アインハルト、紹介するね」

「あ、はい」

「二人とも私の家族で……」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

「一人ちびっ子がいるけど三人で同い年」

悪戯っぽく言うルーテシアの言葉に、

「なんですと!?1．5センチも伸びたのに!」

キャロは正に「ガーン!」という音が出ていてもおかしくない感じに言った。

「アインハルト・ストラトスです」

「うん」

「よろしくねアインハルト」

こうして、お互いに自己紹介を済ませると…

――――ガサッ…――――

――――ザッ…――――

茂みの所から、籠を背負ったガリューが現れた。

「！？」

急に現れたガリューに思わず構えるアインハルトとクリス。

「ストップだ。アインハルト、クリス」

「あー！アインハルトさん、ごめんなさい！大丈夫です！」

「あの子は…」

戦闘になりかねない雰囲気だったので、バルダ達はアインハルトとクリスを止める。

そしてルーテシアがアインハルトに説明する。

「私の召還獣で大事な家族……ガリューって言うの」

それを聞いたアインハルトとクリスは、

「し、失礼しました…」

と、急いで謝罪した。

「私も最初はびっくりしましたー」

コロナも同じようなことがあったのか、苦笑いしながら言った。

「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ？子供たちはどこに遊びに行く？」

するとメガーヌが皆に聞いた。

「やっぱりまずは川遊びかなと……バルダもお嬢も来るだろ？」

「うん！」

「まあ、そっちの方がのんびり出来るしね」

そしてノーヴェがアインハルトの方に向き、

「アインハルトもこっち来いな」

と言った。

「はい」

アインハルトは若干困惑しながらも了承した。

「じゃ、着替えてアスレチック前に集合しよう！」

「「「はいッ！」」」

「こっちも水着に着替えてロッジ裏に集合！」

「「「はーいっ！」」」

こうして、各グループで別れていった。

――――数分後……――――

「あたし、いっちばーん！」

「あーリオずるーいっ！」

バルダ達は水遊びをすべく、大きな川に来ていた。

「アインハルトさんも来てくださーーーいっ！」

するとヴィヴィオが手を振りながらアインハルトを呼んだ。

「ホレ、呼んでるぞ」

「行ってやんな」

ノーヴェとバルダはアインハルトに行ってくるように促すが、

「ノーヴェさん、バルダさん。できれば私は練習を……」

アインハルトは練習がしたいと言う。

「まあ準備運動だと思って遊んでやれよ」
「結構Ｈａｒｄだぜ？あいつ等の水遊びは」
するとノーヴェとバルダは意味深に笑いながら言った。
「ああ、何せあのバルダが根を上げたほどだからな」
「……（あのバルダさんが？）」
ノーヴェの一言に半ば信じられないといった感じのアインハルト。
「なら確かめて来いよ。そうすれば、わかるからさ」
「……はい」
そうして、アインハルトは川に入っていく。
「あ、アインハルトさんどーぞーーー！」
「気持ちいいよ～♪」
その後アインハルトを入れて、ヴィヴィオ達は水遊びを再開した。
――――フヨフヨ……――――

するとノーヴェはいまだにヴィヴィオ達の下へ行ってないクリスに
「ん？いいぞ、お前も一緒に行ってきて」
と言った。
それにクリスはせっせとなにやらジェスチャーで何かを伝えようとする。
「なに？「外装がぬいぐるみなので濡れると飛べなくなります」？大変だなぁお前も…」
ノーヴェがそう言ってると、
「ってノーヴェさん！もしかしてわかるんですか？」
とバルダが驚きながらノーヴェに聞いた。
「あ～、まあ大体はな。それよりもお前は何してんだ？」
「なにって、そりゃ日光浴だよ日光浴」
ふとバルダを見ると、バルダはサングラスをかけながら、大きな大岩に寝転がっていた。
ノーヴェはそんなバルダに呆れながら言った。
「いや、それはわかってるんだけどよ…お前はあいつ等とは遊ばね

えのか？」

「まあ、俺はのんびりしたいからね。それに…どっちにしろ後で運動するからいいじゃねえの。んじゃ、俺は少し寝るから」

そう言ってバルダは昼寝をした。

「やれやれ、相変わらずフリーダムな奴だなー…さて、アインハルトは上手くやってっかな？」

そうして、ノーヴェはアインハルト達の様子を見始めた。

「じゃあ向こう岸までの往復、みんなで競争ーー！！」

「「「おーーーっ！」」」

「おや？どうやら向こう岸まで競争みたいだな」

すると、ヴィヴィオ達は向こう岸まで競争し始めた。

「（……あれ？みんな、速い！？）」

アインハルトは驚異的な速さで泳ぐヴィヴィオ達に驚いていた。

「お、気づいたか？」

その後も、アインハルトはヴィヴィオ達と遊んでいたが、ついには疲れ果て、陸に上がって来た。

「はあ…はあ…はあ……」

アインハルトが休憩してると、

「やっぱり水の中はあんまり経験ないか」

ノーヴェが飲み物を持ってやってきた。

「体力には自信があったんですが…」

アインハルトは飲み物を受け取りながらくたびれたように言った。

「いや、大したもんだと思うぜ。あたしも救助隊の訓練で知ったんだけど、水中で瞬発力出すのはまた違った力の運用がいるんだよな」

「じゃあヴィヴィオさん達は…」

「なんだかんだで週2くらいか？プールで遊びながらトレーニングしてっからな。柔らかくて持久力のある筋肉が自然に出来てんだ」

そう言ってヴィヴィオ達の方を見る。

「どーだい。ちょっと面白い経験だろ？何か役に立つことがありゃ更にいい」

「はい……」

「んじゃ、せっかくだから面白いもんを見せてやろう。ヴィヴィオ、リオ、コロナ！ちょっと「水斬り」やって見せてくれよ！」

するとノーヴェはヴィヴィオ達に向かってそう言った。

「「「はぁーーいッ！」」」

ヴィヴィオ達が元気よく答え、そして構えた。

「水斬り？」

そんなヴィヴィオ達の様子を見ながら、アインハルトは怪訝そうな顔をする。

それにノーヴェは答える。

「ちょっとしたお遊びさ。おまけで打撃のチェックもできるんだけどな」

その間にヴィヴィオ達はもう構えていた。

「えいっ！」

――――シュパァッ――――

「やっ！」

――――シュザァァ！――――

「いきますっ！」

――ズシャアアッ！――――

「……！」

ヴィヴィオ達の水斬りに驚くアインハルト。

「アインハルトも格闘技強いんでしょ？試しにやってみる？」

するとルーテシアがアインハルトもやってみるよう勧める。

「はい」

アインハルトはタオルを取り、川に入っていく。

ヴィヴィオ達は少し離れたところでその様子を見守る。

そして、一定の所でアインハルトは立ち止まり、拳を構える。

「（水中じゃ大きな踏み込みは使えない。抵抗の少ない回転の力で、できるだけ柔らかく……）」

――ドッパァァ！！――――

アインハルトが拳を放つと…大きな音と共に、巨大な水柱ができた。

「あはは！すごい天然シャワー！」

「水柱5メートルくらい上がりましたよ！」

アインハルトの作り出した水柱にはしゃぐヴィヴィオ達。

「……あれ？」

思ったより上手くできなかった様子のアインハルト。
それを見たノーヴェは、
「お前のはちょいと初速が速すぎるんだな」
川に入りながらアインハルトにアドバイスを与える。
そして、目の前で手本を見せる。
「初めはゆるっと脱力して途中はゆっくり…インパクトに鋭く加速、これを素早くパワー入れてやると……」

――シュパァッ！！――――

「こうなる」
ノーヴェが蹴りを放つと、川が割れた。
「……」
ノーヴェの手本を見てみて、早速アインハルトも試す。
「（構えは脱力。途中はゆっくり、インパクトの瞬間にだけ……）」

そして拳を振りかぶり、

「（撃ち抜く！）」

突き出す！！

――――ドバシュ！――――

するとどうだろう。さっき撃ったときよりも前に向かって水柱ができた。

「あ！さっきよりちょっと前に進みました！」

「「すごいっ！！」」

さっきより前に進んだことに感嘆とするヴィヴィオ達。

「も…もう少しやってみていいですか？」

アインハルトはヴィヴィオ達に聞いた。

「はいっ！」

「どんどんどうぞー！」

それにヴィヴィオ達は了承した。

「ありがとうございます。それでは、いきますよ！」

その後、アインハルトの水斬りによって起こる水しぶきにはしゃぐヴィヴィオ達だった。

「ふふっ、楽しそうだね。ヴィヴィオ達」

「ああ。アインハルトもあいつ等と上手く馴染めてるみたいだしな」

楽しそうに遊んでいるヴィヴィオ達を、微笑みながら眺めるルーテシアとノーヴェ。

「というと…このトレーニングツアーに連れてきて正解だった、ということですね」

するとバルダはゆっくりと起き上がりながら言った。

「なんだ起きてたのか。いつ起きたんだ？バルダ」

「ヴィヴィオ達が水斬りをした後ですね。んで、アインハルトが水斬りしたときの音で完全に起きました」

「そうそう、アインハルトの水斬り、凄かったよ。流石は覇王の末裔だね」

ルーテシアがバルダにそう言った。

バルダはそれを聞くとフッと笑い…

「まあね。けど、それ以前に俺の大切な友達だから当然だよ」

と、誇らしげに言った。

少しだけ一緒に歩けたら（前書き）

最近、やることが多くてなかなか執筆できない…

しばらくはこんな感じに投稿が遅くなりそうです。

実に申し訳ない…

少しだけ一緒に歩けたら

バルダ達が川に水遊びに行った後、なのは達はトレーニングをやっていた。

そして程良くトレーニングをして、今は休憩中である。

「アインハルトちゃん、楽しんでくれてるかな？」

「ヴィヴィオ達が一緒ですし、きっと大丈夫です」

なのはの問いにスバルが答える。

「ウチのバルダに、ノーヴェ師匠もついてくれるしね」

「ありがとうございます」

「まあ、バルダはお昼寝してそうだけど」

「あはははは…そうですね」

二人で話していると、なのはがおもむろに

「ところでみんなは大丈夫ー？休憩時間延ばそうかー？」

と、そこで息を整えているフェイト達に言った。

「だ……だいじょーぶでーーーーすッ！！」

「バ…バテてなんか……いないよ…？」

あからさまにバテバテなフェイト達。

エリオは息を整えてながら強がりを見せるフェイトとティアナに苦笑いし、キャロは最早言葉を発することさえ困難なほどに息絶え絶えである。

「二人とも、強がりは体によくないぞ。スポーツドリンクを持ってきたから、コレを飲んで」

するとギルバーがスポーツドリンクを乗せた盆を持ってきた。

そしてそれを二人に渡す。

「ありがとうギルバー」

「んくっ、んくっ……ぷはー！生き返ったーッ！ありがとね、ギルバー」

「気にするな。ほら、エリオとキャロ…スバルとなのはさんの分もあるぞ」

そうしてギルバーは他のみんなにもスポーツドリンクを渡していく。

「「ありがとうございます！ギルバーさん！」」

「ありがと！ギルバー！」

「ありがとうギルバー君」

ギルバーに礼を言いながらドリンクを受け取るなのは達。

「にしても、スバルとギルバーはホントに体力があるわね～」

ふとティアナがスバルとギルバーを見ながらそう言った。

「私は救助隊の訓練の所為か、体力が有り余っちゃってるんだよね～」

「俺は日々鍛錬を欠かしたことはないからな。このぐらいでまだバテるわけにはいかない」

スバルとギルバーはさも当然と言わんばかりに言った。

それを聞いてティアナは少し羨ましそうに

「いいな～。私なんか最近書類の整理しかやってないから肩が疲れちゃって…」

と肩を回しながら言った。

それに皆は思わず苦笑いする。

「そうなの。大きな事件が無いことは良いことなんだけど……書類整理ばかりだとね～」

フェイトもそうなのか、うんうんと頷いている。

するとそこへ…

「おーい！みんなー！もうすぐお昼の時間だからそろそろ集合して手伝ってくれーー！！」

川遊びから早めに切り上げてきたバルダの声が聞こえてきた。

「はーいっ！！それじゃあ皆、ひとまず訓練はここまで。お昼の手伝いに行こう！」

「「「はい！！」」」

号令の後、なのは達はすぐさまお昼の手伝いに向かった。

――――数十分後…――――

「さー、お昼ですよー！みんな集合ーー♪」

「「「はーいっ！」」」

メガーヌの呼びかけに元気よく答えるヴィヴィオ達。

「おかえりー。みんな楽しんできた？」

「もーバッチリ！」

「体冷やさないように暖かいものいっぱい用意したからねー」

するとメガーヌがヴィヴィオ達にそう言った。

「「「ありがとうございます！」」」

そんなメガーヌの気遣いに礼を言うリオとコロナ。

「あらあら、ヴィヴィオちゃんアインハルトちゃん大丈夫？」

メガーヌは体をプルプルと震わせているヴィヴィオとアインハルトを心配そうに見ながら言った。

「いえ…あの」

「だ、だいじょうぶ…です」
ヴィヴィオとアインハルトは大丈夫といった感じで答える。
そこでノーヴェが、
「二人で水斬り練習ずーっとやってたんですよ」
と、少々呆れたようにメガーヌに言う。
「あらー」
メガーヌはそれを聞いて、苦笑いしながら納得したように言った。
「だ、だってバルダお兄ちゃんがあんな事するから！」
「はい！あのようなものを見せられてはジッとしていられません！」
すると、ヴィヴィオとアインハルトがバルダを見ながらそう言った。
そんな二人の発言に、
「バルダ君、一体何をしたの？」
と、バルダに聞くメガーヌ。
「ん？川を［割った］だけですよ」
さらっと答えるバルダ。
「そ、そうなの…」

それに思わず笑顔が引きつるメガーヌ。

「さらっと答えるなぁ、コイツ……まあ、あたしがコイツに水斬りをヴィヴィオ達に見せてやってくれと言ったからなんだが」

ノーヴェが半ば呆れながら言う。

突然ですが、ここで少し時を遡ってみよう……

■■■■■■■■■■■■■■■■

「え？俺も水斬りをやれって？」

「ああ、実力ならあたしよりお前の方が上だし、ヴィヴィオやアイ

ンハルト達の手本になると思ってな」
川で日光浴を洒落込んでいるバルダにノーヴェは言った。
バルダは少しの間思案していたが、
「んまあ、アイツ等の手本になるならいいだろう……わかりました、やりましょう」
と、了承した。
そしてバルダは川に入っていく。
「おーい！俺も水斬りしたいんだけど、いいかーー？！」
バルダがヴィヴィオ達に聞くと……
「あ、お兄ちゃんだ。うん！いいよーー！…みんないいよね？」
「「もっちろん！」」
「はい。それに、バルダさんの水斬りも見てみたいですし」
了承するヴィヴィオ達。
「ありがと。そんじゃあ危ないから少し離れてくれ」
「「「はーいっ」」」
そう言って、ヴィヴィオ達は離れていった。

「さーて、やりますか」

ヴィヴィオ達が離れたのを見て、自身は集中する。

「（確か、インパクトの瞬間に素早く力を加えるんだっけか？）」

バルダは体の力を脱力し、拳を構える。

そして……

「はあっ！！」

拳を素早く撃ち放った。

するとどうだろう……

――ズドーーーン！！――

川が凄まじい轟音と共に、真っ二つに割れた。

「「「……へ？」」」

あまりの出来事に唖然とするヴィヴィオ達。

「Ｈｕｍ…まあこんなもんだろ」

バルダは肩をすくめながらそう言う。

「「「「……」」」」

暫くの沈黙の後…

「「「「えーーーーー！？」」」」

ヴィヴィオ達が盛大に叫び声を上げた。

「なっ……あ、相変わらず出鱈目な事を平気で仕出かすなぁ、バルダの奴」

「ホントだね～」

ノーヴェとルーテシアも、思わず苦笑いしている。

「凄い凄い！川が真っ二つだよ！？」

「流石、ヴィヴィオのお兄さんだね！」

「うん！やっぱりバルダお兄ちゃんは凄いよ！！ねえ、アインハルトさん？」

「…はい！そうですね」

ヴィヴィオ達はバルダが川を割ったことにかなり興奮していた。

「（あれが、バルダさんの力……私もいつか必ず…！）」

アインハルトは、バルダを見て自然と拳を握りしめる。

「（…これなら、力だけなら父さん達と渡り合えるだろう）」

バルダは自身の力を確認すると、ヴィヴィオ達の方に向き、こう言った。

「お前達も日々精進し、頑張っていけば、いつかはこれぐらい出来るようになれるさ。…さあ！川遊びを再開しようか！」

「「「はーーいっ！」」」

そうして、バルダはヴィヴィオ達と少し川遊びをして……その後早めに切り上げてなのは達の元へ向かったのだった。

■■■■■■■■■■■■■■■

「まあ、ヴィヴィオ達にいい刺激になったんならいいか…」

バルダが川を割った瞬間を思い出しながら、そう呟くノーヴェ。

「何か言いました？ノーヴェさん」

たくさんの食べ物を乗せた皿を持ちがら、バルダがノーヴェに聞いた。

「いや、何でもねぇよ。ほら、さっさと昼飯の準備しようぜ」

「そうですね」

そうして二人は昼ご飯の準備に戻っていった。

――――数分後…――――

「じゃあ今日の良き日に感謝をこめて――――――」

「「「いただきます！！」」」

「おぉーーいしーーーいッ！」

「スバル…少しは静かに食べれないのか？まあ確かに美味しいけど」

何やら叫びながら美味しそうに料理を食べるスバルに、ギルバーがたしなめる。

だがスバルの興奮は納まらない。

「だってだってギルバー！すっごく美味しいんだもの！！このお肉なんか特にもう！ねえ！フェイトさん！」

そしてふと、フェイトに話をふった。

「ほんと…！いいですねこれ！」

フェイトも一口食べ、そしてメガーヌに賞賛の言葉を送る。

「えっへん。自慢のソースです♪」

それにメガーヌは誇らしげに胸を張りながら味の秘訣を言った。

「へぇー…こりゃ確かに良いソースだ。メガーヌさん、後で作り方

教えてくれませんか？」

するとバルダが興味津々にメガーヌに聞いた。

「ええ、いいわよ♪あ、その代わりといっては何だけど…私に美味しいピザの作り方を教えてくれないかしら？」

それにメガーヌは軽くＯＫし、バルダにピザの作り方を教えてくれないか聞いた。

「もちろんいいですよ」

バルダはそれに嬉しそうに答えた。

その後バルダ達は、わいわいと賑やかに昼食を食べたのだった。

「「「「ごちそうさまでした！ー！」」」」

そうして一同はお昼ご飯を食べ終わり、各自片づけを始めた。

「片づけ終えて一休みしたら、大人チームは陸戦場ねー」

「「「はいっ！」」」

なのはの言葉に勢いよく返事するスバル達。

「ヴィヴィオさん達はいつもあんな風にノーヴェさんからご教授を？」

ふとアインハルトが一緒に皿洗いをしているヴィヴィオに聞いた。

「あ、そんなに［いつも］でもないんですが……私は最初、スバルさんに格闘の基礎だけ教わったんです。それから独学で頑張ってたらノーヴェが声をかけてくれて…」

「なんだその動きは。そんなんじゃ体壊すぞ」

「その時から時間作っては色々教えてくれて、なんだかんだでコロナとリオの事も見てくれることになって……優しいんです、ノーヴェって」

さも懐かしむように言うヴィヴィオ。

「……わかります。少し羨ましいです。私はずっと独学(ひとり)でしたから」

「……」

アインハルトの言葉に一瞬言葉を失うヴィヴィオだが、

「でもこれからはもう一人じゃないですよね？」

と、アインハルトにそう言った。

「あ……その流派とかはあくまで別にしてですよ！？」

そして慌てたように付け足した。

「いえ、あの…大丈夫です。わかります」

アインハルトも若干それに慌てるが

「（カイザーアーツとストライクアーツ…同じ道は辿れない……）」

そう思いながらヴィヴィオの方に向き、

「（だけど時々、こんな風に……）」

拳を向ける。

ヴィヴィオはそれを見た後すぐに手を拭き、アインハルトの拳を合わせた。

「（少しだけ一緒に歩けたら……）」

アインハルトは切に願うのだった。

ＭＩＳＳＩＯＮ２　過去と未来が交差するとき…（前書き）

就職試験が近くなってきた……気合いを入れねば。

というかこの調子じゃ不定期更新と何ら変わらないなぁ。

今回はＭＩＳＳＩＯＮ編第二段！（本編しようよおい）

数話に分けていきます。ではどうぞ！

ＭＩＳＳＩＯＮ２　過去と未来が交差するとき…

「古代遺跡の調査？」

Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙの事務室にて、バルダの声が響き渡る。

「ええ。今、調査班が調べてるのだけど……そこからロストロギア反応が出たのよ。だからバルダ君にも調査の協力をしてほしいのよ」

モニターから、フェイトの母であるリンディ・ハラオウンがバルダに頼み込む。

「ふ～ん。まあ、いいですよ」

バルダは、紅茶を飲みながらリンディの頼みを軽く了承した。

だが…これから起こることは、バルダは知らない。

―――――――――――――――

「ここが……その古代遺跡ですか？」

［ええ、そうよ］

バルダは今リンディの依頼を引き受け、調査する古代遺跡の入り口に立っていた。

「それじゃあ、入るとしますかね」

［気をつけてね…］

「大丈夫ですよ。依頼を引き受けたからには……ちゃんとやりますから」

そうしてバルダは遺跡に入って行った。

遺跡調査から暫くして……

「おかしい」

バルダが怪訝そうな顔をしながら言った。

「どうしたの？」

「他の調査班の人達の姿が見当たらないんですよ……何かあったのか？」

それにリンディも不思議そうな顔をする。

「そういえば、調査班の連絡も全く来なくなったわ…」

そう話をしながら歩いていると、

「うぅ…」

「ぐっ…」

「……」

調査班の者たちが重傷のキズを負いながら、倒れていた。

「！おい、大丈夫か！」

バルダはすぐさま調査班の人たちへと駆け寄る。

「うぅ、君は……あっ！う、後ろ…！！」

すると、目を覚ました調査班の一人が、顔を青ざめながら叫ぶ。

「？……なにっ！？」

バルダの視線の先には…

――オオォォン！――――

「セブン・ヘルズだと！？」

巨大な鎌を持った悪魔達…セブン・ヘルズがバルダに襲いかかってきた。

「くっ、スペル・シールド！」

バルダは自身の魔力を放出し、シールドを作り、悪魔達の攻撃を防いだ。

「くらいな！！」

バルダはソル＆ａｍｐ；ルナを取り出し、悪魔達を撃ち抜く。

そして魔力弾を撃ちながら叫ぶ。

「リンディさん！早くこの人たちを離脱させてください！」

［わかったわ！］

そうして、リンディはすぐさま調査班をこの場から転移させた。

「何でこんな所に悪魔がいるのか知らねえが……とにかくここには、何かあるってことは間違いないってことだな」

そう呟きつつ、ソル＆ａｍｐ；ルナをしまい……背中に納まっているアベンジャーを構える。

――――オオオォォン！――――

バルダがアベンジャーを構えたその瞬間、セブン・ヘルズがバルダに突進してきた。

バルダはそれを不敵に笑い、

「わりぃがテメエ等雑魚悪魔と遊んでる暇はないんでな…終わりにさせてもらうぜ！！」

〈ディバインバスター！〉

そうしてアベンジャーを前に突き出し、砲撃を放つ。

――グギャアアア！！――

砲撃に巻き込まれた悪魔達は、その魔力の奔流に抗うことが出来ず、消滅した。

「さて、行くか」

バルダが進もうとすると…

〈マスター！上だ！〉

「！」

――――シャァァッ！――――

上からアサルトが数体程襲いかかってきた。

「ちっ！」

バルダは舌打ちをくれながらアサルトの攻撃をかわす。

「今度はアサルトか…しゃらくせえ、アベンジャー！！」

〈了解！！ＢＡＳＡＲＡモード、凶王！！〉

するとバルダのバリアジャケットが変化し、紫の装束に漆黒の甲冑を纏い、漆黒の日本刀をその手に携えたバルダが現れた。

「消え失せろ…斬滅！！」

バルダは、強烈な斬撃をアサルト達に見舞った。

その斬撃は凄まじく、アサルト達は真っ二つに切り裂かれた。

――――シャァァ！！――――

だが、まだ数体のアサルトが残っていて、仲間を殺されて激昂したアサルト達がうなり声を上げながら突貫して来た。

「まだ終わりじゃねえぞ！斬悔！！」

するとバルダは瞬速の居合いを放つ。
そして刀を納める音がすると同時に…アサルト達に数多の斬撃が襲いかかる。
アサルト達は、無惨にも体中をバラバラにされて、息絶えた。

「……アベンジャー。他の悪魔の反応は？」

ふと周りの警戒をしながら、バルダはアベンジャーに問いかける。

少しの沈黙の後アベンジャーはこう答える。

〈ここら辺の悪魔の反応は無いが、この遺跡の最深部……そこにでかい魔力反応がある。恐らく上級悪魔だろう〉

「なるほど。だったら早くしねえとな！」

そうしてバルダは早々に最深部へと向かった。

「ここが最深部か…随分と広いところだな」

遺跡の最深部に到達して、ＢＡＳＡＲＡモードを解除して辺りを見回すバルダ。

そこはどうやら大広間の様で、かなりの広さだった。

「ほう、誰かと思えば……スパーダの血族ではないか」

「！」

何者かの声がこだます。

その後、大広間の奥から…

「全くどうしていつも我々の邪魔をするのか…」

貴族の服を着た男が現れた。

バルダは眉をひそめながら…

「テメエ…悪魔だな？」

と、アベンジャーを構える。

「いかにも……初めまして、スパーダの血族。私の名はルイン…我等が主君、魔帝ムンドゥス様の重臣だ」

ルインという悪魔はニヒルに笑いながら礼をする。

「ムンドゥスの重臣だと！？…テメエ、目的はなんだ…一体何を企んでいる！！」

バルダはアベンジャーをに突きつけながら言った。

ルインは笑みを崩さずにこう言った。

「そうだな…強いていうなら、ムンドゥス様の復活だ」

「なに！？」

しかし、バルダはこの事に疑問を抱く。

「だが、ムンドゥスはあの時父さんによって封印された！それにあの封印はそう簡単に解くことはできない筈だ！」

「ククク…確かに、ムンドゥス様はダンテによって封印されてしまった。だが、封印を解く方法は……私のすぐ後ろにある」

するとルインは自分の後ろにある［物］に視線を移す。

それはケルベロスの頭を模した像に赤黒い懐中時計が埋め込まれた置物だった。

そして何より、禍々しい威圧感を感じさせる物だった。

「それは…なんだ？」

禍々しい威圧感に警戒しながら、ルインに聞く。

「これか？これは［ミスフォーチュン・トラベラー］という魔具で、魔界で魔具の開発を任されていたある悪魔が造り出した逸品でな……大量の魔力を吸うことで、時間の歪みを発生させることができる魔具なのだ。これを使ってムンドゥス様が封印される前の状態に戻し…今度こそ人間界を我が手中に納めるのだ」

「！？」

ルインの説明を受けて、驚愕するバルダ。

〈マスター…〉

「ああ。恐らくリンディさん達が観測したロストロギア反応は、アレだろうな。ちっ、どうやらやるしかないようだな」

「話は済んだか？私はそろそろコレを起動させてムンドゥス様の封印を解きたいのだが…」

ルインの言葉にバルダは

「そんな事、させると思うか？」

アベンジャーを構えながら言った。

「ふっ、だろうな。だがいいのか？このまま戦闘を行い、魔力を使えば、ミスフォーチュン・トラベラーが起動してしまうぞ？」

「Ｈｕｎ！簡単な話じゃねえか……魔力を、使わなけりゃいいんだ

よ！」

そう言ってバルダは一瞬でルインとの距離を詰め、アベンジャーを振り下ろした。

――――ガキン！――――

だがその攻撃はルインに軽々と受け止められてしまう。

そしてルインが手刀で反撃する。

「っ！」

バルダは攻撃が防がれるや否や、すぐさまルインから離れる。

「ふん、魔力を使わない貴様など恐るるに足らん。…ならば、こっちから魔力を捧げるまで」

すると、ルインから凄まじい量の魔力がミスフォーチュン・トラベラーへ注がれていく…

「やめろ！」

バルダはすぐさまルインへ攻撃するが、

「無駄だ…」

ルインが右腕を振るうと、

バルダに向けて真空波が撃ち出される。

「ぐっ…！」

バルダはそれに対応できず、吹き飛ばされてしまう。

「大人しくそこでじっとしていろ」

ミスフォーチュン・トラベラーに魔力を注ぎながら、ルインはバルダに真空波を撃ち続ける。

「くっ…」

バルダはそれをひたすら避ける。

「（ちくしょう…魔力が使えればこんなに苦戦はしねえのに…）」

魔力を使うことが出来ない状況にどうすることのできないバルダ。

「（仕方ねえ…ちょいと無茶するか）」

このままでは埒が明かない。

そう考えたバルダは…

「Ｌｅｔ，ｓ　ｒｏｃｋ！！（派手にいくぜ！！）」

デビルトリガーを引いた。

「セイッ！」

悪魔の姿になったバルダはアベンジャーで衝撃波を放つ。

「ぬんっ！」

それに対し、ルインは真空波で迎撃する。

――ドガアアアン！！――

二人の攻撃によって、砂塵が巻き起こる。

「むっ、奴の姿が消えた…？」

砂塵が消えると…バルダの姿がなかった。

バルダを探していると…上から殺気がルインを射抜く。

「！　そこか！」

上を見ると、バルダがアベンジャーをルインに向けて振りかぶろうとしていた。

「ハアッ！」

「ふんっ！」

ルインは手刀で迎撃する。

二人の攻撃がぶつかり合い、辺りに突風が吹き荒れる。

「はっ！」

そこでルインはもう片方の腕でバルダを貫こうとする。

〈プロテクション〉

――ガキィィン！――――

「なに！？」

ルインの攻撃は、アベンジャーの張った防御魔法によって防がれる。

「ぶっ飛べェェ！！」

「ぐっ！」

バルダはアベンジャーを振るい、ルインを遠くに吹き飛ばす。

そして

「Ｃｒａｓｈ！！（壊れろ！！）」

ミスフォーチュン・トラベラーを壊すべく、全力でアベンジャーを振り下ろす。

だが…

「させん！！」

――――ブオオオッ！――――

「なにっ！？」

アベンジャーが当たる瞬間…竜巻がミスフォーチュン・トラベラーを包み込み、バルダの攻撃を阻害した。

「その竜巻は私を倒さない限り消えはしない……消したければ、私を倒すことだ」

「ちっ…なるほどな。どうりで素手で俺の攻撃を受け流すわ真空波を飛ばせるわけだ…アンタ、［風］を操る能力を持ってるだろ？」

バルダが納得したように言うと、ルインはバレたか、と肩をすくめてみせる。

「そうだ。先程までの攻撃は私の能力によるものだ」

そう言って手から風を生み出すルイン。

「…なかなか厄介だな」

バルダもアベンジャーを構える。

そして…

「「ハアアアアアアアアアアアアアアッ！！」」

二人同時に動き出した。

「シッ！」

ルインは風を右手に集束させ、風の刃でバルダに斬りかかる。

「ッ！せいッ！」

バルダはそれを弾き返し、すぐさま反撃する。

――ガキンッ！！――

だがルインが生み出す風の障壁に弾かれてしまう。

「ふんっ！」

「ぐっ…！」

そして、ルインの風の刃によって切り刻まれる。

バルダは痛みに一瞬動きを止めるが、それでも構わず攻撃する。

「Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ！！（崩れ落ちろ！！）」

「！」

神速の突きの嵐…ミリオンスタッブがルインを襲う。

ルインは風を盾のごとく展開し、バルダの攻撃を防ぐ。

だが、

「なに！？」

「オオオオオオッ！！」

ルインの風の障壁は破られ、ルインはバルダのミリオンスタッブをまともに受けた。

「ぐおおおッ…！」

「Ｂｌａｓｔ！！（吹っ飛べ！！）」

そしてバルダは渾身の力を持って、ルインを吹き飛ばした。

「がはっ！！」

ルインは勢いよく吹き飛び、壁にめり込むように叩きつけられた。

バルダの攻撃は止まらない……

「Ｆｒｅｅｚｅ！！（動くなよ！！）セイヤァッ！！」

ルインが壁に叩きつけられるときには既に構えていて、そして次の瞬間にはルインに向かってバルダはアベンジャーを投げつけた。

「くっ、はあああああ！！」

アベンジャーがルインに突き刺さるまであと僅か…その時ルインは全力で壁を吹き飛ばし、その場から脱出した。

「なかなかタフじゃねえか」

「この程度でやられるようでは、ムンドゥス様の重臣は務まらんからな」

「Ｈｕｎ！違いねえ……な！」

その時である…

「「！？」」

二人に異変が起こったのは…

「なんだ？これは！？魔力が吸い取られている？！」

「む、これは……マズい！ミスフォーチュン・トラベラーが暴走し始めたか！！」

すると、ミスフォーチュン・トラベラーから魔力が漏れ出し、周りの空間が歪み始めた。

そしてルインが発生させた竜巻が消え失せた。

「ちっ！こうなったら暴走する前にたたっ斬ってやる！！」

バルダは舌打ちをくれながらエアトリックでミスフォーチュン・トラベラーに近づく。

「ハアッ！！」

そしてミスフォーチュン・トラベラーを破壊するべく、全力でアベンジャーを振り下ろす。

だがそれが当たることは無かった……

「なっ！？」

バルダの攻撃は当たらず、突如として現れた時空の渦に飲み込まれていた。更にその渦は、バルダ自身をも飲み込み始めた。

「くそっ！！抗えねえ…！！」

デビルトリガーも解け、何も抵抗できず、バルダは着々と時空の渦に飲み込まれていく……

そして時空の渦はバルダを飲み込むだけじゃ飽きたらず…周りの空間まで飲み込み始めた。

「（ちぃッ！マズいな…このままだと渦に完全に飲み込まれちまう……！）」

時空の渦に飲み込まれていく中、バルダは必死に考えを巡らせる。

「（なにか…何かないか？）」
そして周りに何か脱出できるものは無いか探していると、
「（……ん？）」
バルダはある［もの］を見つける。
それを見つけた瞬間バルダはニヤリと笑い、
「チェーンバインド！！」
その［もの］をバインドで縛る。
バルダが縛り上げたものとは……

「なにッ！私の右手に鎖のような物が！？」

そう、ルインである。
ルインは、急に右手が赤い鎖状のバインドで拘束された事に困惑する。

「ッ！貴様！！私を道連れにするつもりか！！」

「Ｈａ！違うね！テメエにこのバインドを引っ張って俺をこっから出してもらうのさ！！」

「な、なんだと！？」

「おっと、壊そうと思うなよ？こいつは俺の魔力を最大限に硬化させた最硬のバインドだからな。例えムンドゥスといえども砕くには時間がかかると思うぜ」

「くっ…」

「さあ、頑張って引っ張ってもらおうか！！」

憤慨するルインをよそに、バルダはバインドを引っ張るよう促す。

「ぐっ…！…ググググ……くそっ！！」

ルインは憎々しげに唸ると、バインドを引っ張り始める。

それによって、少しずつだがバルダの体が時空の渦から出てきた。

「よし、いいぞ！もっと引っ張れ！！」

「貴様…！後で必ず殺してやる！！」

だが…

――――ガゴォッ！！――――

「「んなッ！？」」

順調にバルダのバインドを引っ張っていたルインだったが、突如ルインの足下の地面が崩れ、

ルインの体制が崩れる。

するとミスフォーチュン・トラベラーを中心に、時空の渦がどんどん広がっていった。

それに伴い、周りをブラックホールのごとく飲み込んでいく……

時空の渦の吸い寄せる力が強まり、

「ッ！なに！？」

ルインが時空の渦へと引き寄せられる。

更に引き寄せる力が強くなっていき、遂に……

「「うわあああああああああああ！！」」

バルダとルインは時空の渦に飲み込まれ、姿を消した。
後に残ったのは、荒れ果てた大広間だけだった……

―――――――――――――――

「ん……ここは…？」

バルダが目覚めると…そこは見慣れぬ土地だった。

困惑するバルダだったが…状況を確認するため、ひとまず頭の中を整理する。

「確か…俺はルインとの戦闘中で、いきなりミスフォーチュン・トラベラーが暴走してそん時にできた時空の歪みに飲み込まれちまったんだったな……」

そう言いながらバルダは周りを見渡す。

「…ここは一体どこだ？」

そこには見渡す限り広大な大地が広がっていた。

〈マスター。ここら一帯には生物反応はない……ひとまず移動しようぜ〉

するとアベンジャーが周りには生物がいないことを報告する。

バルダは少し思案すると、

「まあ、そうだな。ここがどこだかわからない以上、とにかく情報を集めないとな」

すぐさま情報を集めるべく、歩き出した。

「〈おーー…〉」

数時間程歩き続けた後、バルダとアベンジャーはある大きな城の前にいた。

〈Ｈｕ～。ずいぶんでけえ城だな～…〉

アベンジャーも、余りの大きさに感嘆の声を出す。
「ああ、これはまた立派な城だな。どんな人がいるのか想像がつくと思うぜ」
〈まあな。んじゃマスター、早速ここの人から情報収集といこうぜ〉
「OK」
そうしてバルダとアベンジャーは悠々と城の中へ入っていく。
大きな扉の前に差し掛かった所で、
「待て…」
扉の方からバルダを呼び止める声が聞こえた。
「貴様、一体何者だ？ここに何しに来た？」
そして警戒したようにバルダに問いかける。
バルダはそれに少し考える素振りを見せ、
「んー、少し情報が欲しいんだよ。ここは一体どこなのか…どんな世界なのか…今は何年なのか…とかね」
と言った。
「……どういう事だ？」

声の主はバルダの言葉に怪訝そうに聞く。

「…まあ正直に言うと、俺もよくわからないんだよ。少なくとも…俺がいた世界とは違うということはわかってるけどね」

「……」

バルダが言い終わるとしばらく沈黙が流れる。

そして…

「わかった、話を聞こう。まずはそれからだ」

声の主が了承の言葉を言った。

「ありがとう。恩に着るぜ」

バルダが礼を言い終わると同時に、扉が開いた。

「なに、困った時はお互い様さ」

するとそこに碧銀の髪と虹彩異色のオッドアイが特徴的な青年がいた。

「はじめまして、僕の名はクラウス。クラウス・G・S・イングヴァルトだ」

「なっ！？」

バルダはその名前を聞いて思わず驚愕した。

何故なら今自己紹介したこの青年が、伝記や回顧録といった様々な資料に載っているあの覇王なのだから…

「（おいおい……これが本当だとすると、俺はタイムスリップしてしまったってことか？）」

バルダがそう考えていると、

「どうした？」

クラウスが怪訝そうにバルダを見ながら言った。

「…いや、何でもない」

バルダは考えるのを一旦止め、自身も自己紹介をする事にした。

「（っても流石に本名を名乗ったら歴史に変化が起こりそうだなぁ。本来俺はこの時代にはいねえし……よし、ここは――――――）」

「此方こそはじめまして。俺の名は…［ファルス］だ」

こうして、本来有り得なかった物語が幕を開けたのだった。

To be next mission…

ＭＩＳＳＩＯＮ２　過去と未来が交差するとき…（後書き）

さてＭＩＳＳＩＯＮ編二回目にしてえらく飛躍した話だなぁと思った今日この頃…この話は感想の所にウィンドさんのご希望に沿って考えました。

ウィンドさん…今は覇王しか出てませんが必ず聖王も出します。もちろん、スパーダも出しますよ。

時間がいくらかかろうと必ずや投稿しますので出来れば首を長くしてお待ちください。

ではまた…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7698q/

魔法少女リリカルなのは DevilsVivid

2011年10月8日15時18分発行